三重県埋蔵文化財調査報告　46

安芸郡安濃町川西

多倉田遺跡発掘調査報告

1981

三重県教育委員会

例　　言

1．本書は、三重県教育委員会が県土木部の執行委任を受けて、昭和55年11月から昭和56年３月にかけて実施した県道草生･曽根線特殊改良工事に伴う安芸郡安濃町町大字川西所在多倉田遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。

2．調査は次の体制で行なった。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　同事務局文化課　主事　早川裕己

調査補助　　伊勢野久好

なお、発掘調査後の出土品整理及び報告書作成は早川があたった。

3．本書の遺構標示については下記の略記号による。なお、方位はすべて磁北を用いた。

ＳＢ；掘立柱建物跡　　ＳＫ；土坑

ＳＤ；溝跡　　ＳＸ；土坑墓

ＳＥ；井戸跡

4. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

序　　文

三重県のほぼ中央を横断し、津市を経て伊勢湾に流入している二級河川安濃川の流域は国史跡明合古墳の所在をはじめ数多くの遺跡が分布している地域である。

今回報告する多倉田遺跡は安濃川中流域の右岸にあり、安濃町大字川西に所在している。この遺跡の調査は県道草生曽根線の交通量増加により本道の北にバイパスを敷設する特殊改良工事に起因するもので、以下報告するように中世を主とする集落跡の一部が明らかになった。

しかしながらこのように地下の埋蔵物を明らかにするということは取りも直さず遺跡の破壊につながるものであり、我々は常に数千年も地下に眠り続けてきた埋蔵文化財について慎重かつ真剣に対処しなければならない。今回の調査は多倉田遺跡全体の約20分の１の面積であるが、中世社会について、一つの資料を提供できたと信ずる。

今後とも埋蔵文化財保護にご理解とご協力を願うものである。

昭和５６年３月

三重県教育委員会

教育長　横　田　英　司

目　　次

Ⅰ　前　　言……1
Ⅱ　位置と歴史的環境……3
Ⅲ　遺　　構……4
〔A地区〕……4
1．弥生時代後期の遺構……5
2．中世の遺構……5
〔B地区の遺構〕……6
1．中世の遺構……7
2．近世の遺構……10
3．時期不明の遺構……10
Ⅳ　遺　　物……10
〔A地区〕……10
1．縄文時代晩期の土器……11
2．弥生時代中期後葉の土器……11
3．弥生時代後期の土器……11
4．古墳時代前期の土器……12
5．平安時代後葉の土器……12
6．鎌倉時代後葉～室町時代の土器……13
7．その他の遺物……13
〔B地区〕……13
1．弥生時代中期後葉の土器……13
2．弥生時代後期の土器……14
3．古墳時代後期の土器……14
4．奈良時代の土器……14
5．室町時代の土器……14
6．その他の遺物……15
Ⅴ　結　　語……17
1．遺構について……17
2．遺物について……18

図　版　目　次

ＰＬ１　多倉田遺跡位置図・多倉田遺跡地形図
ＰＬ２　多倉田遺跡遺構平面図
ＰＬ３　Ａ地区西部主要遺構実測図・ＳＤ26土層断面図
ＰＬ４　井戸実測図
ＰＬ５　土坑墓実測図
ＰＬ６　Ａ地区出土遺物実測図
ＰＬ７　Ｂ地区出土遺物実測図・ＳＸ34出土土器実測図
ＰＬ８　ＳＸ34出土土器実測図・木製品実測図・石製品実測図
ＰＬ９　ＳＥ18出土木製品実測図
ＰＬ10　銅銭拓影・瓦拓影
ＰＬ11　Ａ地区西部調査前風景・Ａ地区西部近景
ＰＬ12　Ａ地区近景・ＳＥ15
ＰＬ13　Ｂ地区調査前風景・Ｂ地区近景
ＰＬ14　ＳＥ18・ＳＥ18断面底部
ＰＬ15　ＳＤ20・ＳＤ21・ＳＤ22・ＳＤ26
ＰＬ16　ＳＸ28・ＳＸ29・ＳＸ34遺物出土状況
ＰＬ17　ＳＥ36・ＳＥ36断面
ＰＬ18　縄文土器・弥生土器・石器
ＰＬ19　弥生土器・土師器
ＰＬ20　緑釉陶器・灰釉陶器・土師器・青磁・山茶椀・常滑・古瀬戸
ＰＬ21　ＳＸ34出土大甕
ＰＬ22　土師器・山皿・石臼
ＰＬ23　ＳＥ18出土木製品
ＰＬ24　銅銭・瓦

表　目　次

第１表　試掘調査結果一覧表
第２表　Ｂ地区出土銅銭一覧表

Ⅰ 前　　言

三重県教育委員会文化課においては、各種開発行為から埋蔵文化財を保護するためにいろいろな施策をとってきた。一つは県内各所に所在する埋蔵文化財包蔵地の遺跡台帳整備である。三重県文化財調査員諸氏をはじめ関係各位の文化財パトロールによる周知の遺跡の現状確認、新発見遺跡の台帳登録によって保護された遺跡は少なくない。また、一つには発掘調査現場毎に行なわれる現地説明会などによる文化財保護思想の普及である。現地で検出された遺構や出土品を実際に見てもらうことによって埋蔵文化財を認識し、その保護思想を高めてもらうなど、その役割は大きい。

さて、今回のような県道改良工事等が調査原因となる公共事業への対応はどうであるか。これらについては年度当初に県庁内の開発関係部課に対して公共事業の照会を行ない、その回答をもとに、遺跡の分布調査を実施している。その中で土器片等の遺物が散布している範囲については試掘調査を行ない、地下における遺物包蔵の様子や遺構の有無を確認し、設計変更による現状保存を前提とした事前調整を計るわけである。その中でどうしても工事計画上設計変更できない箇所についてだけは三重県教育委員会が調査主体となり、発掘調査を実施し、各種図面作成や写真撮影等によって記録保存を行なっている。

今回の調査原因となった県道草生曽根線特殊改良工事の計画地及びその周囲には、周知の遺跡として県遺跡台帳に登録されている川西遺跡（県遺跡番号4374）、八幡前遺跡（同4419）が所在していた。そこで遺跡の現状や範囲を確認するために分布調査を実施したところ、計画地の畑地全域を含む約50,000㎡の範囲で中世の土師器、陶磁器を中心とした遺物散布が確認され、試掘調査が計画された。

試掘調査は、昭和55年７月７日～15日にかけて実施した。その結果表１のような成果が得られた。調査の方法は、道路計画路線延長約270mの区間（水田部分を除く）にほぼ10m毎に細長い試掘坑（基本的に２×４ｍ）をいれて地下の様子を確認することで、計21箇所、延べ面積約200㎡について実施した。計画図面のセンター杭で№28～32、38～47の間にあたる。試掘坑21箇所のうち、遺物・遺構共に検出されなかったのは１箇所だけで、他の20箇所からは遺物・遺構が検出され、事前の分布調査で確認された通り、計画地内畑地全域が遺跡であることが判明した。この結果、水田を除く計画地全域の発掘調査が計画された。遺跡名をつけるにあたり調査対象地の小字名を調べたところ、八幡前、多倉田、広見、世古と４つの小字にまたがっていることがわかった。その中で遺跡のほぼ中心にあたり面積的にも多いことから多倉田の小字名をとり、川西遺跡、八幡前遺跡と２遺跡を含むが、多倉田遺跡（三重県遺跡略記号８ＦＴＤ；８：鎌倉時代、Ｆ：中勢の

集落跡、ＴＤ：多倉田の頭文字）と呼称することにした。

本調査は、県土木部から執行委任を受けて11月10日から開始した。調査区の設定は、調査区が幅11～12m、延長約270mと細長いため、八幡前遺跡を包括する西部地区をＡ地区、川西遺跡を包括する東部地区をＢ地区とし、先ず大地区の設定を行なった。また、それぞれの地区におけるグリッドの設定は、共に北から４ｍ毎に南へＡ、Ｂ、Ｃ列とし、Ａ地区においては西から４ｍ毎に1、2、3…22、Ｂ地区においては東から1、2、3…、34とアラビヤ数字をあてた。Ａ地区のＡ-1、Ｂ-1、Ｃ-1が調査区の最西部にあたり、最東部はＢ地区のＡ-1、Ｂ-1、Ｃ-1にあたる。調査の順序は周囲の状況や作物の関係からＡ地区から開始し、12月18日に埋めもどし作業を終了して、12月19日からＢ地区に移った。翌年３月10日にはＢ地区の埋めもどし作業も含め、現地での発掘調査を終了した。

なお、Ｂ地区の現地説明会を２月８日(日)に実施したところ約80名の見学者を得た。Ａ地区につ

G	規模（m）	遺構	層序（cm） ① 層	② 層	③ 層	④ 層	遺物検出層	遺物 弥生	土師	須恵	陶磁	山茶椀 山皿	他
1	2×4	—	0/20黒灰砂質土	20/40暗褐土	40/110褐細砂		①②	—	—	○	カメ(常滑)	○	—
2	1.4×4	—	0/15 〃	15/30暗褐砂質土	30/50砂礫	50/70褐粗砂	—	—	—	—	—	—	—
3	2×4	—	0/65暗褐土	65/90砂礫層	90/110褐色砂		①	—	○	○	○	—	—
4	2×4	—	0/20黒灰土	20/40暗褐砂質土	40/60暗褐砂		①②	—	○	○	天目	○	—
5	2×4	○	0/20黒灰砂質土	20/40 〃	40/75褐砂質土	75/90黄褐砂	①~③	—	○	○	○	○	—
6	4×1	—	0/50 〃	50/60黄褐砂			①	—	○	○	青磁	—	—
7	2×4	—	0/18 〃	18/60褐砂	60/100黄褐粗砂		①	—	○	○	○	○	と石
8	2×3.7	○	0/25 〃	25/40 〃			—	—	—	—	—	—	—
9	1.7×4	○	0/35 〃	35/70 〃	70/90褐黄砂		—	—	—	—	—	—	—
10	2×4	○	0/75 〃	75/150褐細砂			①	○	○	○	天目 青磁	○	—
11	4×2	○	0/50 〃	50/80 〃	80/90黄褐粗砂		①②	—	○	○	—	—	—
12	2×4	石敷	0/110 〃	110/120褐砂			①	—	ナベ	○	スリ鉢	—	—
13	3.8×2	—	0/20黒灰土	20/60褐砂質土	60/120黄褐砂		①②	—	ナベ	○	○	○	瓦(7~8C)
14	4×2	—	0/50 〃	50/70砂礫	70/120 〃		①②	中期ツボ・カメ	—	—	天目	—	—
15	4×2	○	0/15 〃	15/40褐砂質土	40/50暗褐土		①~③	○	ナベ	○	天目	○	鉄釘
16	4×2	○	0/15 〃	15/45 〃	45/60 〃		①~③	—	○	○	○	—	銅片
17	4×2	○	0/10 〃	10/60 〃			①②	—	○	○	天目 青磁	○	—
18	4×2	—	0/10 〃	10/80褐土	80/110暗褐砂質土	110/140褐砂	①~③	—	ナベ	○	—	○	ハニワ(古後)
19	2×4	PIT多	0/50黒灰砂質土	50/〜褐砂			①	—	古	—	—	○	—
20	2×4	〃	0/60 〃	60/〜黄褐土			①	—	古	○	○	○	—
21	4×4	—	0/60砂礫				①	—	○	—	○	—	—

第１表　試掘調査結果一覧（各層の算用数字は地表からの深さを示す）

いては交通量の多さ、人家の多い地区等危険であったので調査後ただちに埋めもどし作業を実施し、日常の見学者への説明をのぞいて現地説明会は実施しなかった。また、調査期間中には東観中学校をはじめ、村主小学校、草生小学校の児童、生徒の見学者も多数得ることができた。

現地での発掘調査をすすめるにあたり、県土木部道路建設課、津土木事務所、中勢教育事務所、安濃町建設課、安濃町教育委員会、地元川西、村主地区の皆さんをはじめ、田端上野の方々にもご協力をいただいた。記して謝意を表したい。

Ⅱ　位置と歴史的環境

鈴鹿山系の錫杖ケ岳や経ケ峰にその源を発する二級河川安濃川は、芸濃町の南部、安濃町の中央部を横断し、津市域を経て伊勢湾に流入している。その中流域である安濃町では幅約２kmの沖積平野を形成している。

多倉田遺跡(1)は、安濃川右岸の水田が営まれている沖積地より一段高い微高地上に位置し、標高は20m前後である。行政上は安芸郡安濃町大字川西字八幡前、広見、田倉田、世古に属している。遺跡の現状はほとんどが野菜畑で一部育苗地がある。また、遺跡の周囲には集落が広がり、町役場や東観中学校等の公共施設の集中している地域でもある。

安濃川流域は伊勢平野でも早くから拓かれた地域の一つで、遺跡の分布密度も高い。また、現在も公共事業を含めた開発が進んでいる地域で、それらに起因する発掘調査も多く、歴史的環境の一つ一つの点が解明されつつある安濃川流域でもある。ここでは以下時代順に周囲に分布する遺跡について概述したい。

縄文時代では、辻の内遺跡(2)から晩期の粗製深鉢、納所遺跡①から粗製、半精製の深鉢、精製研磨の浅鉢②が出土しているが何れも遺構からの出土ではなく、個体数も少ない。また、中期まで遡るものとしては津市野田地内と半田地内で土器片が表面採集されているにすぎない。

弥生時代では、雲出川流域の中ノ庄遺跡③に続いて安濃川流域でも納所遺跡が母村的役割りをもちながら形成される。中期になると遺跡の数も増加し、美濃屋川流域では辻の内遺跡、北端遺跡(3)、亀井遺跡④(4)が形成されるようになる。何れも当遺跡から東南東約2.5kmほどの位置である。中でも亀井遺跡⑤では土坑から中期後葉の土器が一括出土しており、土器編年上重要な資料を呈示している。後期になるとひき続いて営まれる遺跡を含めてさらに分散、増加する。桐山遺跡⑥(5)、森山Ｂ遺跡⑦(6)、竹川遺跡⑧、養老遺跡⑨、柳谷遺跡⑩、大ケ瀬遺跡⑪、平栄遺跡⑫など小規模な集落が営まれる。

古墳時代では、前述の弥生遺跡がひき続き営まれるところが多い。古墳の築造も始まり、安濃

川流域最古の築造と思われる坂本山古墳群⑬は南東約6.5kmの長谷山東麓に所在する。4世紀末頃の築造と考えられており、これより遡る所謂古式古墳は安濃川流域では発見されていない。5世紀になると、中流域の首長墓的性格をもつと考えられる明合古墳⑭(7)が、北北西 1.3kmの台地上に築造される。2段築成の大型方墳で、国史跡に指定されている。6世紀代の古墳としては、メクサ古墳群⑮、日余1号墳⑯(8)が知られる。また、北北西 2.8kmに所在する大塚古墳群⑰(9)のうち円墳3基が、グリーン道路建設に伴い昨年調査され、この時期の築造であることが判明している。西南西約3kmの長谷山周辺には数百基にものぼる小円墳群によって形成される長谷山古墳群⑱(10)が6世紀後半から7世紀前半にかけて築造される。

歴史時代では、調査例も少なく辻の内遺跡、桐山遺跡、納所遺跡、養老遺跡、上村遺跡などが弥生時代や古墳時代との複合遺跡として知られていたにすぎなかった。県営圃場整備事業に伴い昭和53年度に北北西約1kmの北浦遺跡⑲(11)、昭和55年度に南東約 1.3kmの浄土寺南遺跡⑳(12)が発掘調査され、奈良時代から平安時代の建物跡等が検出された。北浦遺跡ではさらに中世墓が3基、浄土寺南遺跡では平安時代の大型木組井戸が検出され貴重な資料が明らかになった。安濃川流域には、両岸の丘陵頂部を中心に数多い中世城館の所在が知られている。当遺跡の周囲にも藤ケ森城㉑(13)、浄土寺城(14)、連部城(15)が所在している。何れも遺構の遺存度が悪い。安濃川流域の中世城館で遺存度の良好なものには上流で雲林院城、中流で北北東約2.3kmに所在する安濃城(16)があげられる。

Ⅲ 遺　　構

〈A 地 区〉

検出された遺構は、弥生時代後期の溝1条、土坑1基、中世の掘立柱建物1棟、溝7条、土坑5基、井戸1基である。

これらは、12m×80mと細長い発掘区の各所で検出されているが、町道より西の発掘区では北西部に遺構が集中しており、遺構の空白部分が多い。

調査地は、西部から標高21m前後で続き、町道より東から徐々に傾斜していく。最東部は標高20.4mと60cmほどの比高差がある。南北方向はほぼ平坦である。

遺跡の層序は、第1層に表土（畑耕作土）が20cmあり、第2層に茶褐色土が30cmほど続き、第3層に遺物包含層として暗茶褐色土がある。層厚は30cm～40cmほどである。第4層は黄褐色砂質土の地山となる。全体に層質は砂質を主体にしているが、西部では粘質が強い。地山面はほぼ平坦で続いているが、西部では南西へかなり傾斜し低くなっていく。又、最東部は表土から地山ま

での層厚が約40cmと浅い。さらに、最東部から西へ４ｍほどは近年の農業基盤整備事業によって攪乱されていることを確認した。

１．弥生時代後期の遺構

(1) 溝

ＳＤ14 発掘区の中央を東から西へ斜めに横断するように検出された大溝である。幅は東端で5.5m、西端で８ｍと西へ徐々に広くなる。深さは東端で20cm、西端で60cmと西へ徐々に傾斜していく。遺構埋土は３層からなり、上層は遺物包含層（第３層）と同じ暗茶褐色土、中層は黒茶褐色粘質土、下層は暗灰色粘質土となる。中央よりやや西で段をつくるように底部がくぼむが、それより東部は上２層からなる。Ａ地区から出土した弥生土器のほとんどが、この遺構内から出土している。後期の壺、甕、高杯の破片の中に若干の中期壺片が混在しており、層位別の遺物適出はできなかった。

(2) 土坑

ＳＫ５ 東の発掘区北隅で検出されたもので、ＳＫ４と重複しており全体の形状は不明である。深さ20cm。埋土は茶褐色砂質土である。Ｓ字状口縁甕が出土している。

２．中世の遺構

(1) 掘立柱建物

ＳＢ１ 発掘区の最西部で検出されたもので、規模は南北２間(4.2m)×東西２間(4.2m)。柱穴の掘り方は円形で、径20cm～30cm、深さ約20cmである。柱間はほぼ2.1mの等間であるが、東側列の柱並びは悪い。束柱をもち、倉庫風の建物であろう。棟方向はＮ10°Ｅである。

(2) 溝

ＳＤ３ ＳＢ１の約４ｍ東で、ほぼ平行して南北に検出された。幅40cm、深さ６cm～10cm。北は発掘区外へのびているが、南端は4.5mほどで完結している。埋土は暗茶褐色粘質土である。山茶椀、土師器片が多い。

ＳＤ６ ＳＫ８のすぐ西側で、ほぼ南北に検出された。幅1.8m～３ｍ、深さ20cm～30cmと南へ広く、深くなる。両端は各々南北の発掘区外へのびている。埋土は暗茶褐色砂質土である。土師器片の中に弥生後期土器片が混在して出土した。

ＳＤ11 発掘区の北辺中央で、山の字状に検出された。東隅部はＳＤ14の北肩と重複している。幅40cm～70cm。深さは中央で30cm～40cm、西や東の隅部では20cm～30cmと浅くなる。埋土は暗茶褐色土である。山茶椀、土師器片の中に、若干ではあるが、弥生後期土器、須恵器、灰釉陶器片が混在している。

ＳＤ12 発掘区の中央から東西にのび、各々南へ屈曲しコの字状に検出されたものである。幅

50cm～90cm、屈曲部付近では約1.2mと広くなる。深さは西部で20cm、中央部で35cm、東部では70cmとなり、徐々に東へ傾斜していく。埋土は暗茶褐色砂質土である。多量の山茶椀、土師器（鍋、羽釜、皿）の中に微量ではあるが、弥生後期土器片、布目瓦片が混在して出土している。

ＳＤ13　ＳＤ14の南部溝内で重複して検出された。ＳＤ12と平行で、幅30cm～40cm。深さ10cm～20cm。両端が各々完結しており、延長は4.9mである。埋土は茶褐色粘質土である。若干ではあるが山茶椀が出土している。

ＳＤ16　発掘区南東隅で、ＳＥ15に切られるように重複して検出された。両肩が検出できた箇所で幅2.6m、深さ40cm。埋土は暗茶褐色砂質土である。山茶椀、山皿、土師器皿、常滑甕が出土している。

(3)　井　戸

ＳＥ15　発掘区南東隅で、ＳＤ16を切るように重複して検出された。井戸の掘り方は円形で、径2.1mである。深さは検出面から1.8mある。井戸の構造は、扁平な河原石（標準法量10×20×20cm）を円形に積んだ石組井戸である。底部には井筒として使用されたと考えられる曲物が３段分遺存していた。曲物は径40cm前後の円形のものであるが、遺存度は極めて悪い。また、曲物の最上段検出面が、現在の地下水位と合致している。石組の南半は積み状態が良好であったが、北半はかなり崩れていた。河原石の積み方は、黄褐色の砂礫層から直接積まれたものである。山茶椀、土師器片が出土している。

(4)　土　坑

ＳＫ２　ＳＢ１のすぐ北側で、南辺の一部と南西隅部が検出された。深さ13cm。若干の土師器片と共に布目瓦が出土した。

ＳＫ４　ＳＫ５を切るように重複して東辺の一部が検出された。深さ70cm。埋土は混灰暗茶褐色粘質土である。山茶椀、常滑甕の中に須恵器甕が混在して出土している。

ＳＫ７　ＳＤ６の南端を切るように重複して、北辺の一部が検出された。深さ20cm。さらに中央が円形に16cmほどくぼむ。埋土は暗茶褐色砂質土である。

ＳＫ８　ＳＫ４の南東約10mにあり、東辺をＳＫ９と重複して検出された。長軸２m、短軸１mで隋円形を呈している。深さ12cm。埋土は暗茶褐色砂質土である。土師器片が少量出土している。

ＳＫ９　ＳＫ８の東辺を切るように重複して検出された。長軸1.6m、短軸0.9mで、隅丸長方形を呈している。深さ10cm。山茶椀と土師器片が出土している。

〈Ｂ　地　区〉

検出された遺構は、中世の溝９条、井戸１基、土坑６基、土坑墓３基、近世の井戸２基、時期

不明の円形周溝１条である。

これらは、11m ×136m という細長い発掘区の各所で検出されたが、東半は遺構の検出されなかった部分が面的にひろがる。西端も西へ地山面が傾斜していき遺構が検出されていないところから、この微高地の東西の斜面は利用されず、中央の平坦な部分でさらに南北の発掘区外へ遺構はひろがるものと思われる。掘立柱建物のように整然と並ぶPit はない。また、発掘区の中央から西で検出された溝は、一定の規画性が認められる。

調査地は北から南へ徐々に傾斜しており、標高は20.9m ～20.6m と30cmほどの比高差がある。東西にはほとんど平坦である。

遺跡の層序は、第１層に表土（畑耕作土）が20cmほどあり、第２層に暗茶褐色砂質の遺物包含層が続く。北辺では層厚が40cm～50cmと厚いが、傾斜して低くなる南辺では10cmほどである。地山は黄褐色砂質土であるが、発掘区の東端から西へ20m ほどは礫の混入が多く認められた。

１．中世の遺構

(1) 溝

ＳＤ17　発掘区の西部で検出されたもので、西は地山面の傾斜に沿って落ち込みへ続く。最大幅は３m ほどあるが、東へ延長15m ほどで２m と狭くなり、さらに南へ弯曲しながら発掘区外へとのびている。深さは50cm～60cm。弯曲する箇所から徐々に浅くなり、南端では７cmと極めて浅い。出土遺物は多く、土師器、山茶椀、常滑大甕片が主で、黄瀬戸椀、施釉陶器が若干あり、須恵器甕片、布目平瓦が混在している。埋土は暗茶褐色砂質土であるが、U字状の底部では拳大の礫が多く混入していた。また、平行して幅30cmほどの溝がはしるが深さ10cmほどで、出土遺物はない。

ＳＤ19　ＳＤ17の北約10m にあり、発掘区の北辺と平行して東西にのび、さらに両端が屈曲して北へのび発掘区外へ続く。何かを区画するような溝であるが、全体の形状は不明である。また、西隅屈曲部はＳＥ18に切られるように重複している。幅は0.6m ～１m 、深さ16cm。山茶椀、土師器片が少量出土している。

ＳＤ20　ＳＤ19の東約５m から東へ20m ほどのびる。ＳＤ19と同様に東西で屈曲してさらに北の発掘区外へのびている。幅は２m ～2.7m と広く、深さも60cm～70cmある。東部は20cmと、上がってしまう。遺物は少なく、若干の土師器片が出土したにすぎない。

ＳＤ21　ＳＤ20の南側で、発掘区の中央を約27m 東西に流れる溝である。ＳＤ20とはほぼ平行している。東西でそれぞれ屈曲し、南の発掘区外にのびている。幅は中央で約１m 、屈曲する方へ徐々に広くなり、最大幅は２m である。深さは20cm～30cm。常滑大甕の破片が主で、他に古瀬戸四耳壺片、須恵器甕片がある。埋土は茶褐色砂質土で、底部ではＳＤ17と同様に拳大の礫が多量に含まれていた。

ＳＤ22　ＳＤ21のすぐ南で、ほぼ平行してはしる。西は徐々に内弯して発掘区外にのびている

が、明確な屈曲部はつくらない。東も屈曲の度合いは弱く、ＳＤ21に接近していく。幅は中央が広く、1.1mある。両端では0.8mとやや狭くなっていく。深さ20cm～30cm。常滑大甕片、土師器小皿片の中に若干の須恵器片が混在していた。

ＳＤ26　発掘区のほぼ中央を南北にはしる溝である。幅は2.6m～5.2m。深さ1.2m～1.8m、徐々に南へ深くなる。中央から南へ幅が広くなるが、検出時に埋土の差はなく一体のものと考えられる。土層の断面観察によって層序をみてみると、大きく上層と下層にわけられる。ただ出土遺物に時期差は認められない。中央に堀り込みの層が認められるが、これは下層のような状態に埋没した後さらに掘り直したものであろう。南側で犬走りのような平坦な面が検出され、北側の溝掘り方断面と合致しており、幅2.6mの溝に大きな掘り込みを入れたようにもみられるが、ここでは溝に付随するものとみたい。出土遺物は多量で、山茶椀、土師器、常滑大甕を主として石鍋、黄瀬戸椀があり、山茶椀の中には墨書されたものも一点ある。

ＳＤ30　ＳＤ26の南隅肩から東へのびる溝で、東端はＳＫ31に切られるようにおわる。幅40cm、深さ20cm。

ＳＤ37　発掘区の東部にあり、南北に流れ両端は各々発掘区外にのびている。幅70cm、深さ20cm～30cmで、南へ徐々に深くなる。常滑大甕片、土師器片が少量出土している。

ＳＤ38　ＳＤ37の東約7mにあり、平行して流れる。南半はＳＤ39との重複もあり、東側の肩が明確でない。幅1m、深さ20cm～25cm。ＳＤ37と同様に南へ徐々に深くなる。山茶椀、土師器片、常滑大甕片が少量出土している。また、北栄銭である「熙寧元宝」が1枚ある。

ＳＤ39　ＳＤ38の東側肩南半を切るように検出された。北で屈曲して東へのびている。幅0.7m～1.5m、深さ40cm。山茶椀、土師器片が少量出土している。

(2)　井　戸

ＳＥ18　発掘区の西部で、ＳＤ19の西屈曲部を切るように重複して検出された。井戸の掘り方は円形で、径2.2m、深さ1.8mである。立方体にちかい河原石（標準法量10×10×20cm）を使用した石組井戸である。Ａ地区で検出されたＳＥ15で使用されている河原石より若干小振りである。石の積み方は丁寧で、上半は円形、下半は方形にちかい。底部には井戸枠として使用された側板4枚が遺存していた。腐食が著しく、遺存度は良くない。4枚の板を枘で方形に組んだもので、4枚のうち2枚で枘と枘穴が確認できた。埋土は暗茶褐色砂質土で、底部では青灰色粘質土となる。地下水位が下ったのか、側板検出面では湧水がない。出土遺物は山茶椀、土師器小皿、木製品（曲物底板、下駄）である。

(3)　土　坑

ＳＫ23　ＳＤ20の東溝内で検出された。深さ20cm。土師器（羽釜、小皿）片の他に黄瀬戸椀、布目瓦、須恵器片が出土している。

ＳＫ24　ＳＤ20の東隅溝内で検出された。切り合い関係は不明である。径は1.1m×1.7mで、

隋円形を呈している。深さ20cm。土師器（鍋、羽釜、小皿）片が出土している。

ＳＫ27　ＳＤ26のすぐ東側で検出された。規模は1.3m ×2.1mで、長方形を呈している。深さ10cm～20cm。埋土は黒褐色砂質土である。土師器片が若干出土している。

ＳＫ31　ＳＤ30の東端を切るようにして重複する。1.1m ×2.9mと細長い隋円形を呈している。深さ15cm～30cm。

ＳＫ32　ＳＫ31の北東９ｍで、半隋円形に検出された。発掘区外にのびていて全体の形状は不明である。常滑大甕の断面Ｎ字を示す口縁部が出土している。埋土は暗褐色砂質土である。

ＳＫ33　ＳＫ32のすぐ東で検出された。深さ20cm～30cm。常滑大甕片、土師器片が少量出土している。埋土は暗褐色砂質土である。

ＳＫ40　発掘区の東端で、ＳＤ39の東肩を切るように重複して検出された。深さは１ｍあり、素掘りの井戸を思わせる。埋土は暗茶褐色砂質土であるが、拳大の礫も多く混入している。

(4)　土坑墓

ＳＸ28　ＳＤ30のすぐ北側にあり、長軸1.8m、短軸1.0mと長方形を呈している。埋土は茶褐色砂質土で、若干の炭化物が混入している。長軸はＮ31°Ｗを示す。「開元通宝」２枚の他に「景徳元宝」をはじめ11枚の北宋銭があり、計13枚の銅銭が埋置されていた。その出土状況は、位置もレベルもまちまちで意図的に埋置された状態ではなかった。埋土も単一で、土師器などの副葬品は出土していない。

ＳＸ29　ＳＸ28の北東４ｍにあり、長軸2.4m、短軸1.2m～1.4mとやや西へ開く長方形を呈している。埋土は茶褐色砂質土で、中央上部で炭化物の混入がみられたが明確な層を形成していない。深さは60cmで、平坦な底部から10cmほどは小石がびっしりつまっていた。山茶椀、土師器小皿、常滑大甕の破片が出土している。また、ここでも北宋銭の埋置がみられ、「天聖元宝」をはじめ17枚の銅銭が出土した。その出土状況はＳＸ28と同様に遺構内各所から出土している。長軸の方向はＮ31°Ｗを示している。

ＳＸ34　ＳＫ33のすぐ南東で検出された。長軸2.3m、短軸1.7mを長方形を呈している。埋土は上層が暗褐色砂質土で、下層が茶褐色砂質土である。上層底部で２箇所10cm×10cmの範囲で炭化物がみられた。深さは上層底部で40cm、下層底部で検出上面から55cm～60cmである。上層で常滑大甕４個体分の口縁部、胴部破片、山茶椀、山皿、土師器小皿が出土している。大甕はＮ字状口縁をもつもので、その出土状況はそのままつぶれたという状態ではなかった。同時に多数の礫も検出されたが、集石した状態ではなかった。ただ大きな河原石は焼けており、部分的に赤褐色を呈している。下層底部にはＳＸ29よりは大きい礫が検出されたが、その集石の密度は粗い。下層底部で「至和元宝」をはじめ５枚の北宋銭が出土している。その出土状況は他の２基と同様で、まとまってはいなかった。長軸の方向は他の２基と直交するような関係にあり、Ｎ59°Ｅを示している。

2．近世の遺構

ＳＥ25　ＳＤ26のすぐ西側にあり、ＳＤ21の東肩を切るように掘り抜かれた石組井戸である。掘り方は円形で、径1.8m、深さ2.2mである。埋土は黒灰色砂礫土である。石組の内径は上部が50cm、中位で70cm、下部で60cmと胴脹らみの様相を呈している。幅20cm、長さ55cmの蒲鉾板状の板材を縦に凸面を内側にして円形に並べ、その上端を押えつけるようにして河原石を積んでいったものである。近世陶磁器片、燻平瓦が出土している。

ＳＥ36　発掘区の東部ＳＤ37の西で検出されたものである。掘り方は円形で、径1.8m、深さ2.3mである。石組井戸の内径は上半が50cm、下半が60cmで、ＳＥ25のような胴脹らみではなく、ほぼ垂直に積まれている。小振りの河原石を使用しており、積み方も斜方向に丁寧である。内部構造はほぼＳＥ25と同じであるが、ここでは丸く並べられた板の裏に竹材の付着が認められた。箍でしめてあったと思われる。近世陶磁器片、燻平瓦が若干出土している。

3．時期不明の遺構

ＳＤ35　発掘区の東部ＳＸ34の南で、発掘区外にむけて弧状に検出された。大部分が発掘区外であるが全体としては円形を呈するものであろう。幅1.0m～1.5m、深さ20cm。溝の南肩から発掘区外にむけて徐々に地山面が高くなっていく。埋土は暗褐色粘質土である。弥生中期壺片、緑釉陶器片、常滑大甕片、土師器小皿片が出土している。

Ⅳ　遺　　物

出土した遺物は、縄文時代晩期から鎌倉時代、室町時代までの各時代の土器を中心として、石製品、土製品、木製品、銅銭、瓦がある。発掘調査面積が約2,500㎡のわりには木製整理箱で40箱分と、遺物の出土量は多くない。その中でも出土量の多かったものに、溝を中心に各所で出土している山茶椀、土師器、常滑大甕といった中世のものがあげられる。次に多く出土したものにＳＤ14を中心に出土した弥生後期の土器があげられる。また、遺物の出土状況であるが、Ａ地区で集中して出土した弥生土器を除くと、Ａ地区、Ｂ地区での出土遺物の内容には差はない。ただ全体に遺物の遺存度が悪く、銅銭など小さな遺物を除いて完成品はなく、破片も小片であったりして図化できたものは少ない。全く図化できなかった遺物に緑釉陶器５片がある。

〈Ａ　地　区〉

1．縄文時代晩期の土器

鉢（1）　口径22cm。口縁部の破片である。高さ5mmほどの貼付け凸帯が巡る。胎土中に多くの砂粒を含み、茶褐色を呈している。器表の剝離が著しいが凸帯下方に貝殻腹縁による条痕文が若干残る。

2．弥生時代中期後葉の土器

壺形土器A（2～4）　受口状口縁を有する壺である。2は、口径21.7cmと大形品で、口縁部に断面V字状の凹線が巡る。3は、口径10.6cm。口縁部に1条の浅い凹線が巡る。細い頸部には細かい刷毛目調整が施され、内面には絞り目が残る。4は、2や3のように口縁部は明確な帯状にならず、細い頸部からゆるやかに内彎しながら受口状口縁をつくる。口径6cmと小さい。口縁部には沈線が1条巡る。口頸部には櫛歯刺突文が施されている。頸部内面には絞り目が残る。全体に器面の剝離が著しく、その他の施文、調整は不明な点が多い。2が茶褐色を呈している他は明茶色を呈している。すべてSD14からの出土である。

壺形土器B（5）　大きくラッパ状に開く口縁部をもつ。口縁端部は断面三角形を呈し、肥厚しながら垂下する。口径21cm。垂下する口縁帯には2帯の櫛歯刺突綾杉文が施される。また、口縁部内側にも櫛歯刺突文が巡る。胎土中に多くの砂粒を含んでいる。明茶色を呈している。SD14出土。

また、胴部破片の中にはヘラ描沈線を太い頸部に巡らし、貼付け凸帯に斜格子状の刻み目を施したもの（6）や、2条のヘラ描沈線で区画し縄文を施したもの（7）、櫛描波状文と櫛描横線文を組み合わせたもの（8）もある。

3．弥生時代後期の土器

甕（9）　受口状の口縁部をもつもので、屈曲面に櫛歯刺突文が巡る。口径14.6cm。頸部には櫛描横線文が施される。外面は刷毛目調整が残るが、内面は剝離のため不明である。胎土中に多くの砂粒を含んでいる。部分的に煤の付着が認められる。明茶色を呈している。SD14出土。

高杯（10・11）　10は、杯部口径28.6cm。杯底部と口縁部との境に明瞭な稜線をもち、口縁部は外反し、端部は平坦な面をつくる。細長い脚柱部には櫛描横線文が施され、内面には絞り目が残る。裾部は欠損している。胎土は緻密で、若干砂粒を含んでいる。赤褐色を呈している。SD14出土。11は、太い頸部に7条の櫛描横線文が施されたもので、三方に円形透孔がつけられている。裾部はゆるやかに外反し、端部は丸い。茶褐色を呈している。

甑（12）　底部には焼成前に穿孔が施される。全面剝離のため調整等は不明である。明茶色を呈している。

ミニチュア土器（13～15）　何れも手捏ねのものである。中でも13は精巧で、櫛描波状文、櫛

描横線文が施される。口縁部の屈曲面には刺突文もみられる。口径3.2cm、器高5.2cmで、口縁部が若干欠けている。胎土は緻密で、赤褐色を呈している。

4．古墳時代前期の土器

小型丸底壺（17）　球状の腹部に大きく外反する口縁部をもつ。口径12.2cm。底部は欠損している。器面の剝離が著しく、調整等は全く不明である。胎土中に若干の砂粒を含む。明茶色を呈している。

小型壺（18）　底部のみの出土で、全体の形状は不明である。突出するような平底で、胴部への変換点にユビオサエによる圧痕が残る。胎土は緻密で、明茶色を呈している。

高杯（19）　杯部口径10cmと小形品である。浅く扁平な杯部で、口縁部でやや内傾し、端部は丸くおさめられる。杯部と脚部の変換するところに若干細かい縦方向の刷毛目が残るが、ゆるやかに開く脚部は丁寧にヘラ磨きされている。裾部が欠損しているので位置は不明であるが、円形透孔が三方に穿孔されている。脚部内面には絞り目が残る。

小型台付鉢（20）　口径8.8cm、器高7.4cm。鉢部は剝離のため調整方法が不明な点も多いが、下方には縦方向の粗い刷毛目が残る。器壁の厚い台部にかけてユビオサエによる圧痕が残る。台部はナデつけのため器面に凹凸がみられる。鉢部には黒斑が1か所ある。内面は黒褐色、外面は明茶色を呈している。ＳＤ14出土。

蓋（21）　笠状の頂部に環状のつまみをもつものである。裾部外面に若干刷毛目が残るが、器面の剝離は著しい。胎土は緻密で、細砂を若干含んでいる。明茶色を呈している。

5．平安時代末葉の土器

灰釉椀（22～24）　何れも破片である。22は、体部まで白灰色の灰釉がつけがけされる。底部の貼付高台は、やや外に開くもの（23）と、垂下するもの（24）がある。

灰釉段皿（25）　底部の小片である。貼付高台は断面台形で、やや外に短かく開くものである。

土師器椀（26）　口径16.2cm、器高6.4cm。体部は張らず、なめらかに開く。口縁端部は丸くおさめられる。器壁は薄く、胎土は緻密である。貼付高台は器壁が薄く、やや開くものである。内面は黒褐色、外面は暗茶褐色を呈している。

土師器皿（27・28）　27は、口径14.7cm、器高3cm。底部は薄く平坦につくられ、口縁部はやや肥厚し端部は丸くおさめられる。胎土中に金雲母をかなり含み、小石も若干ある。口縁部の一部で茶褐色となる他は明茶色を呈している。28は、口径12.4cm、器高3cm。平坦な底部からやや直線的な体部をつくり、口縁部はやや内傾して丸い端部をつくる。明茶色を呈している。

土師器鍋（29）　口径15cm。口縁端部を内面に折り返したものである。頸部から縦方向の粗い刷毛目調整がみられる。内面は横方向の刷毛目である。外面には煤の付着がみられる。

6．鎌倉時代後葉～室町時代の土器

土師器鍋（30）　口縁端部が内面に折り曲げられるもの。口径15cm。刷毛目調整はみられず、ナデつけによる凹凸がある。

土師器皿A（31～33）　やや丸味をおびた底部から大きく外反し、さらに口縁部で外反するものである。口径8.2cm～11.3cm、器高1.5cm～2.1cm。胎土中にかなり金雲母を含む。明茶色を呈している。

土師器皿B（34～36）　口径8.2cm～8.4cm、器高1cm～1.4cmの扁平なものである。胎土は緻密で、明茶色を呈している。

山茶椀A（37～42）　口径16cm前後、器高5.5cm前後のものである。胴部は40がやや直線的であるのに対して他は張りをもつ。口縁部はやや外反する。底部には断面三角形を呈する高台が雑に貼付けられている。何れも底部には糸切り痕が残る。42は成形段階に変形したものであろうか、片口のようになる。

山茶椀B（43）　胴部中位に墨書のみられるものである。口径14.0cmと、A種に比べて小振りである。胴部は直線的で、白灰色を呈している。高台はつけられていない。

山皿（44・45）　口径8.6cm～8.8cm、器高2.4cm。平坦な底部からほぼ同じ厚味で口縁部が直線的に開くもの（44）と、口縁部で薄くなりやや外反するもの（45）がある。何れも底部に糸切り痕を残す。

7．その他の遺物

磨製石斧（16）　刃部と基部が欠損しており全長は不明である。中央部のみの出土である。両面がていねいに研磨されている。現存長8.8cm。

土錘（46）　全長4.5cm、直径1.6cm。穿孔径3.5mm。茶褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。

曲物（47）　直径50cmの円形のもので、下端部は欠損している。内面には縦方向、斜方向の刃痕が残る。側板は桜皮で綴じて固定されている。ＳＥ15の井筒として使用されていたもので、底板はない。遺存度が極めて悪く復元実測したものである。

平瓦（48）　凹面はナデられ若干の細かい布目痕が残るのみである。凸面は縄目。

〈B　地　区〉

1．弥生時代中期後葉の土器

壺（49～51）　49・50は、長い頸部からラッパ状に大きく開く口縁部をもつもので、口縁部内面に瘤留突起を施してある。何れも4個単位で、49は4か所、50は3か所に施す。頸部の施文は

49が櫛描横線文、50がヘラ描沈線である。櫛描横線文と櫛描波状文が併用された胴部（51）も出土している。

2．弥生時代後期の土器

甕（52）　S字状口縁をもつものである。口縁部のたちあがりは、ほぼ真直ぐで、口縁端部はさらに外方へ若干ひきだされて内側に面をつくる。口縁上部の屈曲部に櫛歯刺突文が施されている。口径18.5cm。茶褐色を呈している。

台付小型壺（53）　算盤珠状の胴部をもち、裾の開く台部は櫛描横線文と三方円形透孔が旋される。台部内面には絞り目が残る。全体に剝離が著しく、調整方法は不明である。茶褐色を呈している。

3．古墳時代後期の土器

須恵器杯身（55・56）　内傾する短かいたちあがりをもつ。全体に浅く扁平である。受部はやや上向きに外方へ短かく引き出される。ヘラ削りは底部のみで、範囲は狭い。7世紀初頭に比定されるものである。

4．奈良時代の土器

須恵器杯蓋（57・58）　天井部が平坦なもの（57）と、ややふくらむもの（58）がある。口縁端部は短かく垂下するもので、内面がややふくれる。宝珠形つまみは欠損している。

土師器杯（59）　口径15.6cm。底部外面は未調整のままで、口縁部内外面はヘラで磨かれている。底部内面は螺旋暗文が施される。胎土は緻密で硬く、赤褐色を呈している。

5．室町時代の土器

(1) 包含層等出土の土器

土師器羽釜（60・61）　口径は60が25.6cm。61が22.3cmである。器壁は薄く、胎土は緻密である。鍔下面より下部は煤の付着がみられる。剝離が著しく刷毛目調整等は不明である。

土師器鍋（62）　推定口径27.4cm。口縁端部は内側へ折り返される。器壁は薄く胎土は緻密である。煤の付着は厚く、口縁部までみられる。

土師器皿C（63）　口径10.4cm、器高2.4cm。薄い底部から内弯する口縁部をつくり、端部は鋭い。胎土は緻密である。剝離が著しく、調整等は不明である。明茶色を呈している。

土師器皿D（64）　口径8.4cm、器高2.3cm。器壁は厚く、手捏ねによる凹凸がみられる。胎土に砂粒を含む。明茶色を呈している。

山茶椀B（65～68）　何れも胴部から口縁部にかけて直線的である。口径は14cm前後の小振りのものである。底部には糸切り痕が残る。胎土中に小石を含んでいる。白灰色を呈している。68

の体部には墨書が施される。仮名文字であるが、口縁部が欠損しているので墨書全体は判読できない。

常滑大甕（69～73）　何れも口縁部の小片である。縁帯部がN字状に折りかえされたもの（69・70）と口縁部が肥厚し玉縁形にちかづくもの（71～73）にわかれる。

古瀬戸四耳壺（74）　口縁部は欠損しているが推定口径は12.8cmである。頸部に３条の櫛描横線を巡らしている。四耳は低平である。肩部以下が欠損しており、肩部の張り等は不明である。胎土は緻密で、黄緑色を呈している。ＳＤ21から出土したものである。

灰釉小皿（75）　口径9.2cm、器高2.3cm。灰緑色の灰釉が底部まで施される。胎土、焼成共に良好である。削り出し高台か。

(2)　ＳＸ34出土の土器

常滑大甕（78～81）　何れも縁帯部がN字状のものである。縁帯は幅が狭い。傾きは垂下するもの、内傾するもの、外反するものと様々である。口径は78が51cm、79・80が35cm前後、81が18.8cmである。破片が散逸した状態で出土した。78は最大径が肩部にありよく張っているが、81は撫で肩である。内面は何れも平行に整形痕が残り、粘土紐の輪積み手法がわかる。81は伊賀焼か。

常滑片口鉢（82）　口径30cm。底部は欠損しているが、平底であると思われる。胴部は直線的で、口縁端部は外側に面をつくり、中央が凹む。

山茶椀Ｂ（83～86）　口径が15cm前後のもの（83・84）と、12.5cmのもの（85・86）があるが、何れも胴部に張りはなく、直線的である。胎土に小石を含み、白灰色を呈している。83の胴部には「ニ」の墨書が施される。

土師器皿Ｃ（87～89）　口径は何れも10cmのもので、器壁が薄い底部から内彎する口縁部をつくる。口縁端部は鋭い。器面の剝離が著しく、調整方法等は不明である。

土師器皿Ｄ（90～92）　口径は6.4cm～８cm、器高0.8cm～１cm。前述のＣ種と同じように底部は薄くつくられ、口縁部はやや肥厚して短かく開くものである。胎土は細砂を含み、明茶色を呈している。

６．その他の遺物

〈石製品〉

石鏃（54）　現存長1.6cm。鋭い先端と基部が若干欠損している。片面はふくらみ縁部に刃がつけられる。片面は平坦である。サヌカイト製である。

石鍋（76）　口縁部の小片が出土した。推定口径20cm。煤の付着はみられず、鍔より下部は縦方向に研磨されている。滑石製である。

殻磨臼（77）　直径35.4cmの上臼で、４分の１ほどが遺存していた。磨面の「ふくみ」は1.2cm

である。中心の「ほぞ穴」は貫通していない。6溝と7溝の磨目で、全体としては6分画であろう。磨目と「殻落し」の方向から、逆時計廻しの臼であったの思われる。

〈ＳＥ18出土木製品〉

曲物底板（101～102）　共に円形のもので、木取りは柾目である。腐食がすすんでおり遺存度は良くない。102では穿孔が1か所みられる。

下駄（103・104）　103は現存長13.7cm。前部が欠損している。後歯は台板を方形に穿孔し、差し込み形式で、そのほぞの部分が遺存している。中央が凹んでいるが、後鼻緒孔と思われる。後部は圧痕によりやや凹む。104は歯部と思われるが103とは一致しない。

側板（105～108）　井戸枠に使用されたもので、方形に枘で組んだものである。105と106で枘と枘穴の一部が遺存していた。全体に腐食がすすんでおり遺存度は良くない。

〈銅銭〉（93～100）

今回出土した銅銭は総数37点である。銭種が不明なものが17点ある。他は2枚の唐銭「開元通宝」を除くとすべて北宋銭である。そのほとんどが3基の土坑墓からの出土である。初鋳年、出土遺構、点数等は第2表の如くである。

〈瓦〉

丸瓦（109・110）　109は凸面に縄目が残るが110ではていねいにナデ消している。凹面は共に細かい布目痕が残る。

平瓦（111～113）　すべて凸面に縄目、凹面に細かい布目痕が残るものである。

銭　種	初　鋳　年	（西暦）	ＳＸ28	ＳＸ29	ＳＸ34	ＳＤ38	包含層	計
開元通宝	唐　武徳4年	（621）	2	0	0	0	0	2
景徳元宝	北宋　景徳元年	（1004）	1	0	0	0	0	1
天聖元宝	〃　天聖元年	（1023）	0	0	1	0	0	1
至和元宝	〃　至和元年	（1054）	0	0	1	0	0	1
嘉祐元宝	〃　嘉祐元年	（1056）	0	1	0	0	0	1
嘉祐通宝	〃　〃	（1056）	0	1	1	0	0	2
治平元宝	〃　治平元年	（1064）	1	0	0	0	0	1
熙寧元宝	〃　熙寧元年	（1068）	1	0	0	1	1	3
元豊通宝	〃　元豊元年	（1078）	3	0	0	0	0	3
元祐通宝	〃　元祐元年	（1086）	1	0	0	0	0	1
紹聖元宝	〃　紹聖元年	（1094）	0	1	0	0	0	1
元符通宝	〃　元符元年	（1098）	0	0	1	0	0	1
大観通宝	〃　大観元年	（1107）	0	1	0	0	0	1
政和通宝	〃　政和元年	（1111）	1	0	0	0	0	1
不　明			3	12	2	0	0	17
計			13	16	6	1	1	37

第2表　B地区出土銅銭一覧表

V 結　　語

今回の調査は道路幅にあわせた幅10m ～12m 、延長約250m といったいわばトレンチ調査であり約50,000㎡という広大な面積の多倉田遺跡の全容を明らかにするという事はできない。ただ、約2,500㎡という限られた発掘調査ではあったが、出土した遺物、検出された遺構から明らかにされた点も多い。ここではそれらの明らかになった事実を整理して若干の考察を加えてみたい。

(1) 遺構について

今回検出された遺構の中で一番古い時代のものはA地区で検出されたＳＤ14で、弥生時代後期の溝である。ただ住居跡が検出されておらず、集落について言明することはできないが、弥生時代前期の納所遺跡を母村として徐々に集落が分散増加していくなかで、多倉田遺跡においても後期集落が営まれていたであろうということについては一つの資料[22]になると考える。その場合、住居跡群は遺構の検出状況から発掘区の北の地域が考えられる。

古墳時代から平安時代については少量の遺物が出土したのみで、遺構は検出されていない。

多倉田遺跡はこのように弥生時代に集落を営みはじめたであろうことは想定できるが、何といっても中心となる時代は中世である。検出遺構は溝が中心で、集落形態等について言及できないが、１つ１つの溝が方形に巡ると思われ、何かを区画するような状態で検出されている。ＳＤ11・12・19・20・21・22である。各々の南北軸は、ＳＤ11・12がN 30° E、他はN 60° Eを示している。A地区とB地区では南北軸の示す角度が違うが、各々の地区では同じである。また、それらの溝がおたがいに重複していないなど全体としても溝の在り方にまとまりが認められる。さらにB地区におけるこれら遺跡群のすぐ東側で、中世城館の堀を想定させるような深い溝ＳＤ26も検出されたが、今回の発掘区ではそれに対応するような溝が検出されておらず各々南北へどのようにのびているかは不明である。これまでに発掘調査された中世の集落跡ではこのような溝は検出されておらず、方形に巡るような溝、深い堀状の溝はどのような性格をもつものであろうか。時代が遡るが、平安時代後半では嬉野町平生遺跡[23]で建物群を囲む遺構として柵列が検出されている。

井戸は２基検出されている。中でもA地区で検出されたＳＥ15は、ＳＤ12によって囲まれた内側に掘り抜かれた石組井戸である。ＳＰ12が方形に巡るものとすれば、北東隅の位置にあたる。井戸の形態については２基とも「石積井戸」[24]にあたり、中世の集落跡からの検出例がふえている。

土坑墓は３基検出された。何れもＳＤ26の東側で、遺構の少ないところにつくられている。何れも銅銭を副葬しているところに共通点がある。多倉田遺跡の附近では安濃町田端上野・北浦遺

跡におけるＳＸ16・17・18、３基の検出例がある。その中でＳＸ18からは銅銭６枚がまとまって出土している。明和町古里遺跡ではＳＸ２から銅銭と共に和鏡、土師器鍋、灯明皿が出土している。さらに上野市馬場西遺跡におけるＳＸ24の検出例がある。[25] 銅銭は６枚であった。古里遺跡の場合は明らかに集落の中の一定の区域にＳＸ２をはじめ群在[26]しているが、他はやや離れた場所につくられたものと思われる。鈴鹿市椎山中世墓のように一定の墓域に古瀬戸や常滑の蔵骨器に埋葬される形態と違った埋葬形態について一つの資料[27]を呈示したといえよう。また、松阪市南山遺跡では、常滑大甕を転用した甕棺墓ＳＸ221・222の２基が検出されている。[28] 中でもＳＸ222では双鶴瑞花鏡と土師器杯の副葬があった。ここではこれらの中世墓の被葬者の階層等については言及をさけて今後の研究にまちたい。

(2) 遺物について

縄文晩期の粗製鉢は１片であったが、安濃川流域では発掘調査によって出土した遺跡としては辻の内遺跡、納所遺跡、浄土寺南遺跡に次いで四番目である。

弥生中期の土器は出土点数が少ないが壺は受口状で凹線文が施されるものが主である。また、瘤留突起が配されるものもある。これらは北勢・中勢地域では比較的よくみられる器種である。中期後葉の土器については谷本鋭次氏が津市亀井遺跡の報告書の中で土坑から一括出土した土器を中心に詳しく論述されている。[29]

古墳時代から平安時代にかけての遺物は極めて少なく、中でも須恵器が少なかった。

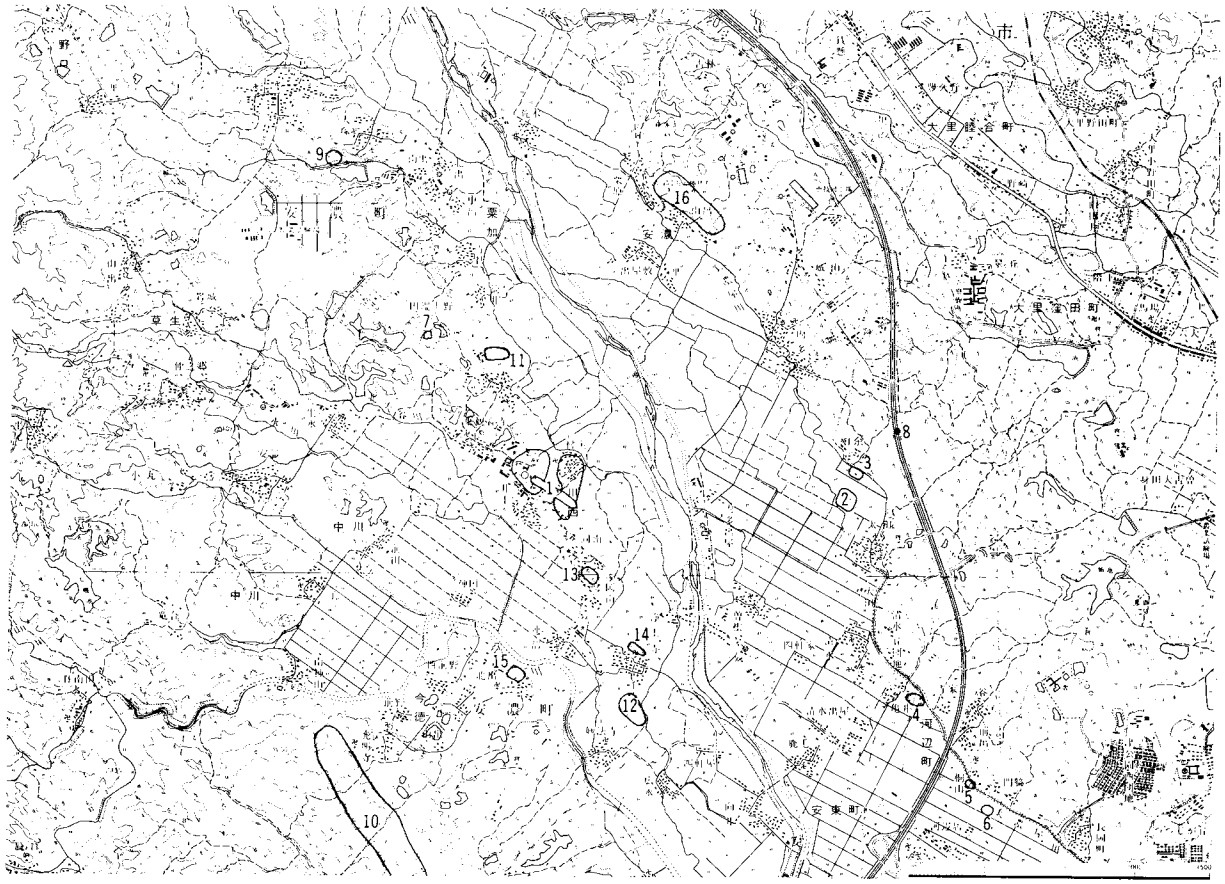
平安時代では、灰釉陶器の他に緑釉陶器の出土があげられる。何れも椀の小片で図比できるものはない。濃緑色を呈し軟質のものが４片、黄緑色を呈し硬質のものが１片ある。県下でも発掘調査件数の増加に伴い検出例も増加し、すでに30遺跡をこえているが、[30] そのほとんどが数片の出土である。

中世では、山茶椀、常滑大甕が多量に出土している。山皿、土師器は前者に比べて少ない。山茶椀はＡ、Ｂ種と２種類出土しているが、貼付高台をもつＡ種にしても粗雑な貼付高台で平安時代末や鎌倉時代前半に遡るものではない。図化できなかったものを観察してもＢ種の方が多い。山皿は少なく、高台をもつものはない。土師器はほとんどが小皿の破片で、羽釜や鍋が極めて少なく煤の付着が認められる遺物が少ない。煮炊きするといった日常生活を彷彿させるような遺物が少ないのは何故だろうか。それに比べて常滑大甕は破片であるが多量に出土している。口縁部が断面Ｎ字形を呈するもので、山茶椀、鉢とあわせて所謂行基焼第三型式[31]の特徴を示しており、南北朝以降の所産と考えられる。このように常滑大甕が多量に出土しているということは、とりもなおさずこの時期に流通経路が発達し普及した一つの顕れであろう。石鍋も小片ではあるが１点出土している。九州地方では普遍的に出土しているが県下では出土例が極めて少なく、阿児町殿畑遺跡[32]、大山田村西沖遺跡[33]に次いで３例目となった。搬入品であろう。

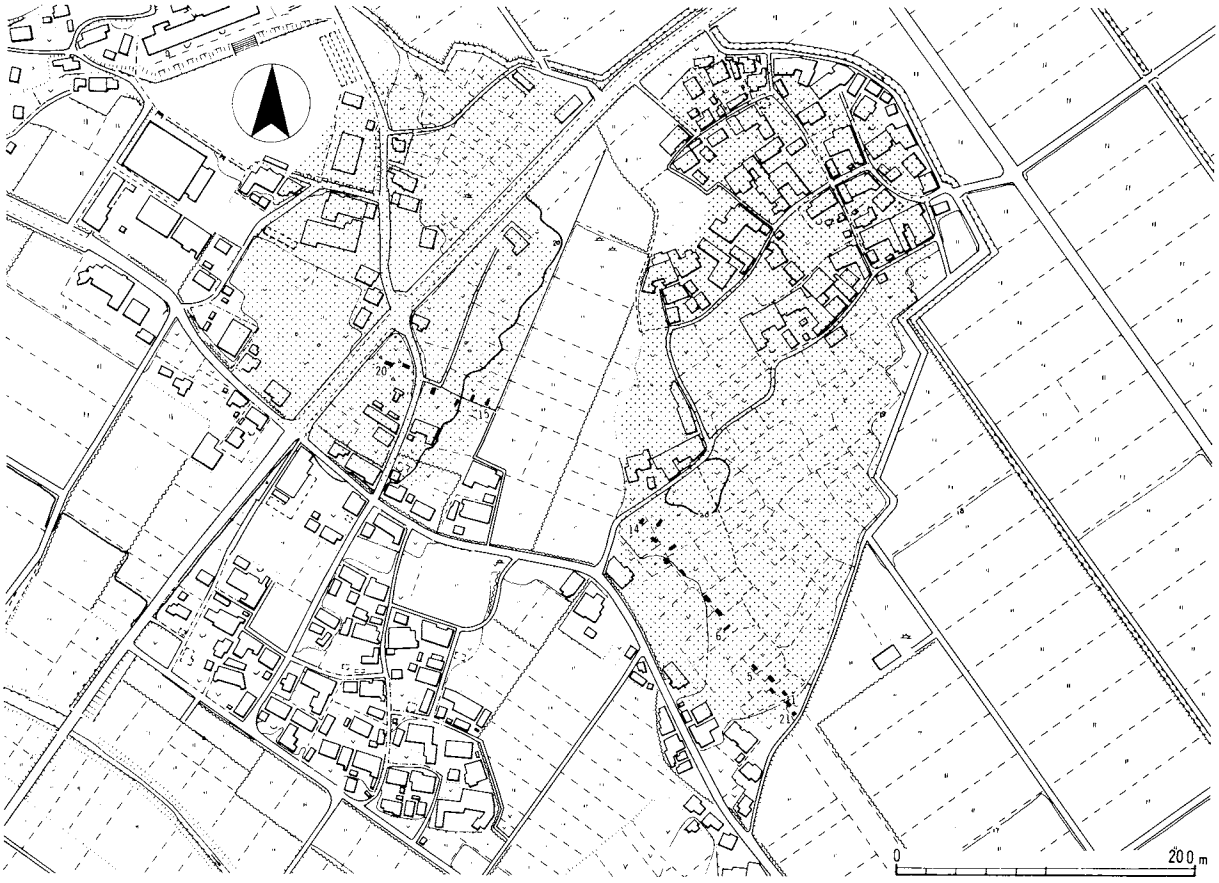
註

① 伊藤克幸・下村登良男『安芸郡安濃村・辻の内遺跡』安濃村遺跡調査会　1975
② 伊藤久嗣『納所遺跡―遺構と遺物―』三重県教育委員会　1980
③ 谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1972
④ 註①に同じ
⑤ 谷本鋭次「津市河辺町・亀井遺跡」『昭和47年度県営圃場整備地域埋蔵文化財調査報告』4　三重県教育委員会　1973
⑥ 下村登良男・谷本鋭次『養老・森山B・桐山遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1972
⑦ 註⑥に同じ
⑧ 同　上
⑨ 同　上
⑩ 浅生悦生・駒田利治ほか『野田遺跡群発掘調査報告』津市教育委員会　1974
⑪ 伊藤久嗣・谷本鋭次『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告』Ⅰ　三重県教育委員会　1973
⑫ 註⑪に同じ
⑬ 小玉道明ほか『坂本山古墳群・坂本山中世墳墓群』津市教育委員会　1970
⑭ 三重大学歴史研究会原始古代史部会「三重県安芸郡明合古墳について」『ふびと』23　1965
⑮ 三重大学歴史研究会原始古代史部会『メクサ4号墳発掘調査報告』津市教育委員会　1972
⑯ 吉村利男『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告』Ⅱ　三重県教育委員会　1974
⑰ 昭和55年度に三重県教育委員会が発掘調査を実施。
⑱ 小玉道明「津市長谷山古墳群について」『三重の文化』15　1958
⑲ 伊藤久嗣「安芸郡安濃町・北浦遺跡」『昭和53年度県営圃場整備地域埋蔵文化財調査報告』3　三重県教育委員会　1979
⑳ 昭和55年度に三重県教育委員会が発掘調査を実施。
㉑『三重の中世城館』三重県教育委員会　1977
㉒ 伊藤久嗣氏が註②の中で、納所遺跡をいわば母村とした見解をまとめている。
㉓ 吉村利男『平生遺跡発掘調査報告』　平生遺跡調査団　1976
㉔ 新田洋『荘遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1980
㉕ 谷本鋭次『古里遺跡発掘調査報告―D地区―』三重県教育委員会　1974
㉖ 山田猛「上野市比自岐・馬場西遺跡」『昭和52年度県営圃場整備地域埋蔵文化財調査報告』2　三重県教育委員会　1978
㉗ 伊藤久嗣「椎山中世墓」『三重用水加佐登調整池関係遺跡発掘調査報告』鈴鹿市教育委員会　1978
㉘ 下村登良男『南山遺跡発掘調査概報Ⅰ』松阪市教育委員会　1979
㉙ 註⑤に同じ
㉚ 小玉道明・山沢義貴・谷本鋭次『斎王宮跡資料』三重県教育委員会　1978
㉛ 杉崎章『常滑の窯』学生社　1970
㉜ 新田洋『殿畑遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1980
㉝ 昭和55年度に三重県教育委員会が発掘調査を実施。

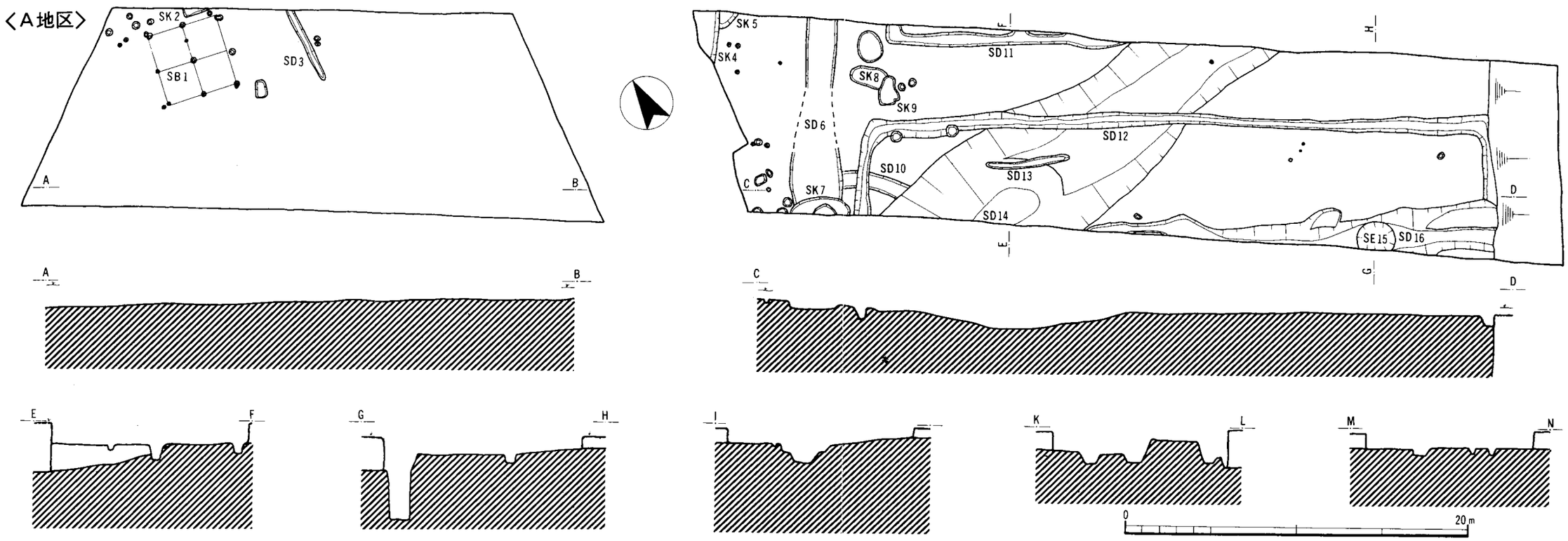
図　　版

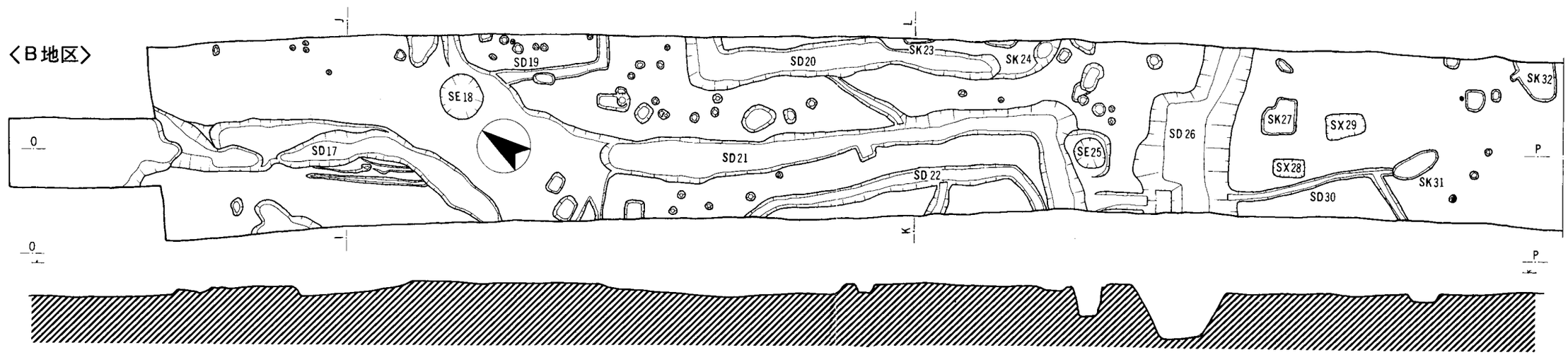


多倉田遺跡位置図（国土地理院 1：25,000　椋本・津西部）

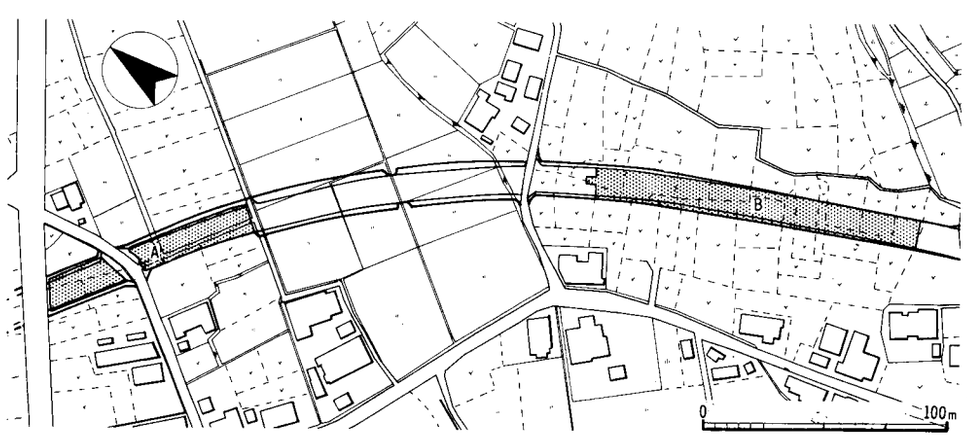


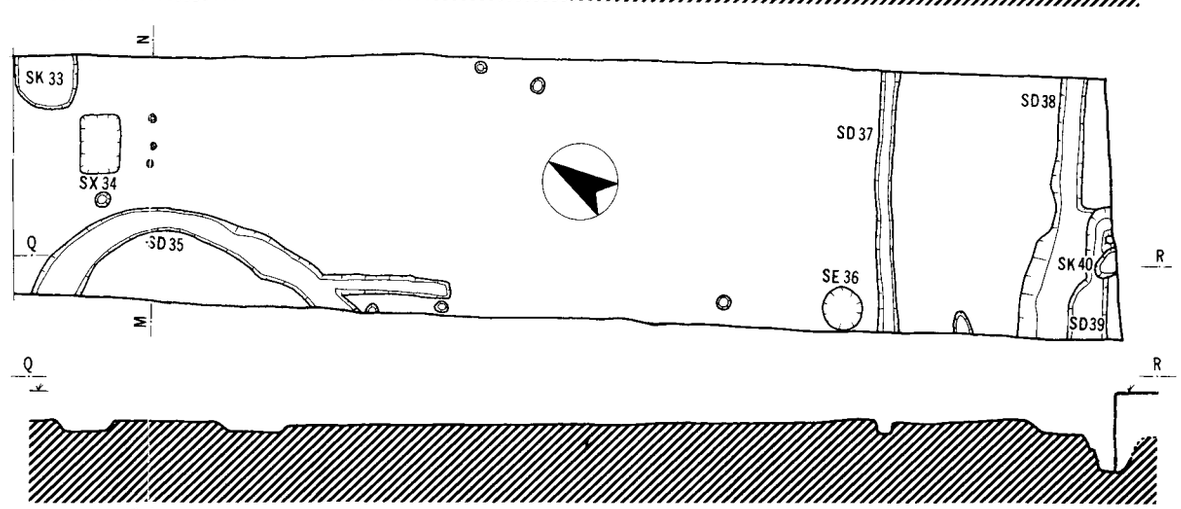
多倉田遺跡地形図（1：5,000 網目；遺跡範囲 数字；試掘坑番号 安濃町地形図12・17　1：2,500 1978）



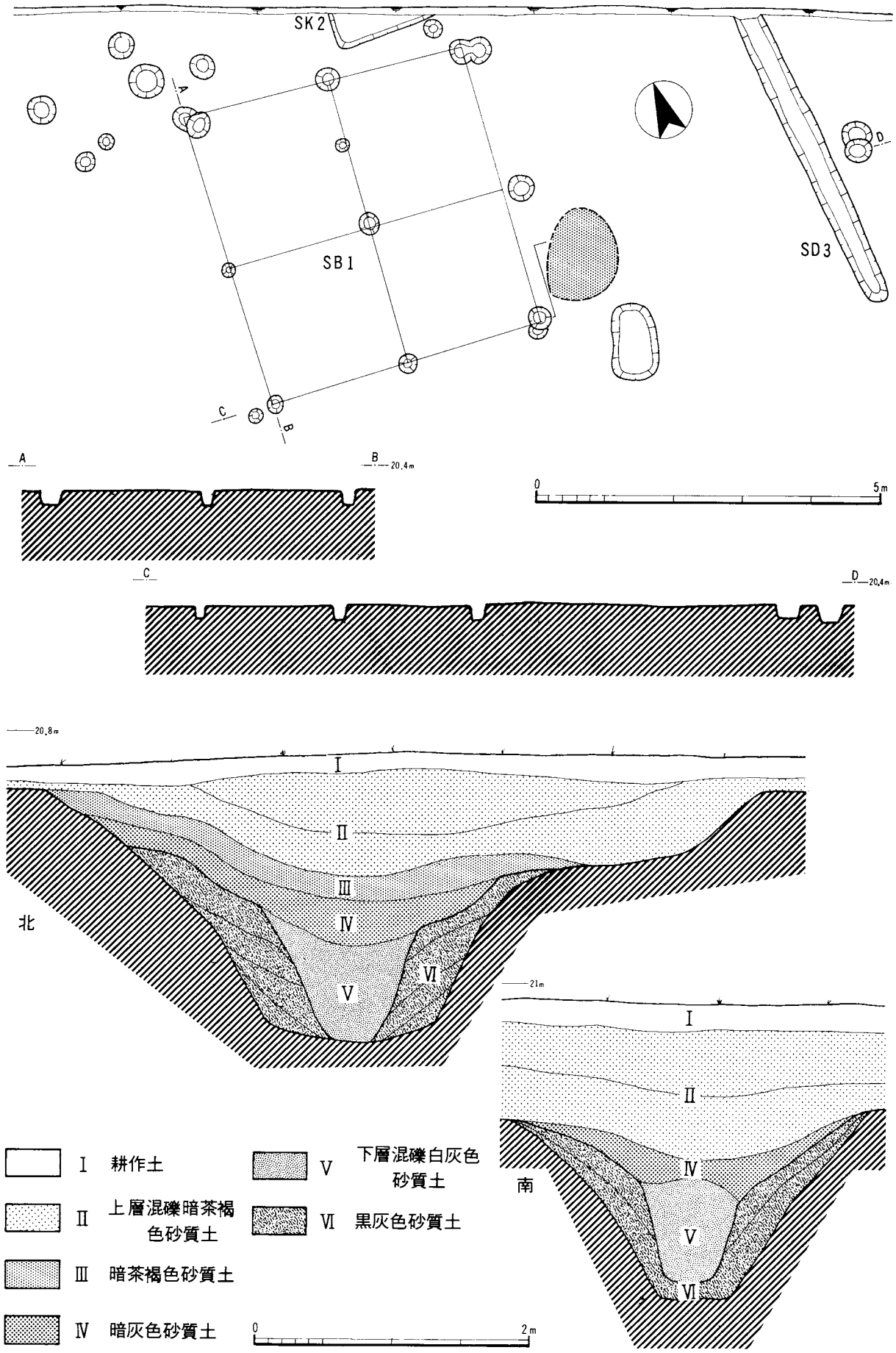


発掘区位置図（1：3,000）

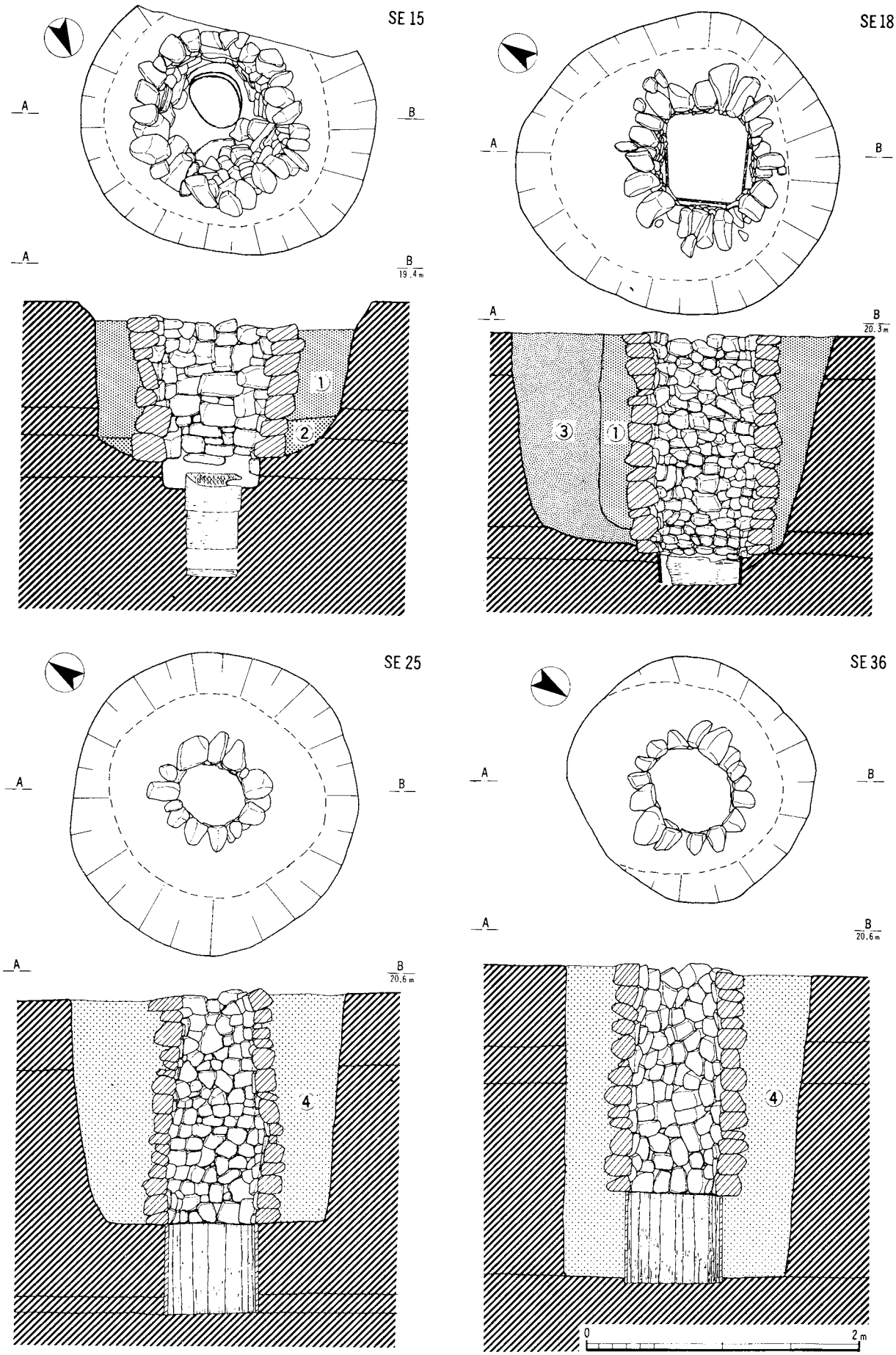




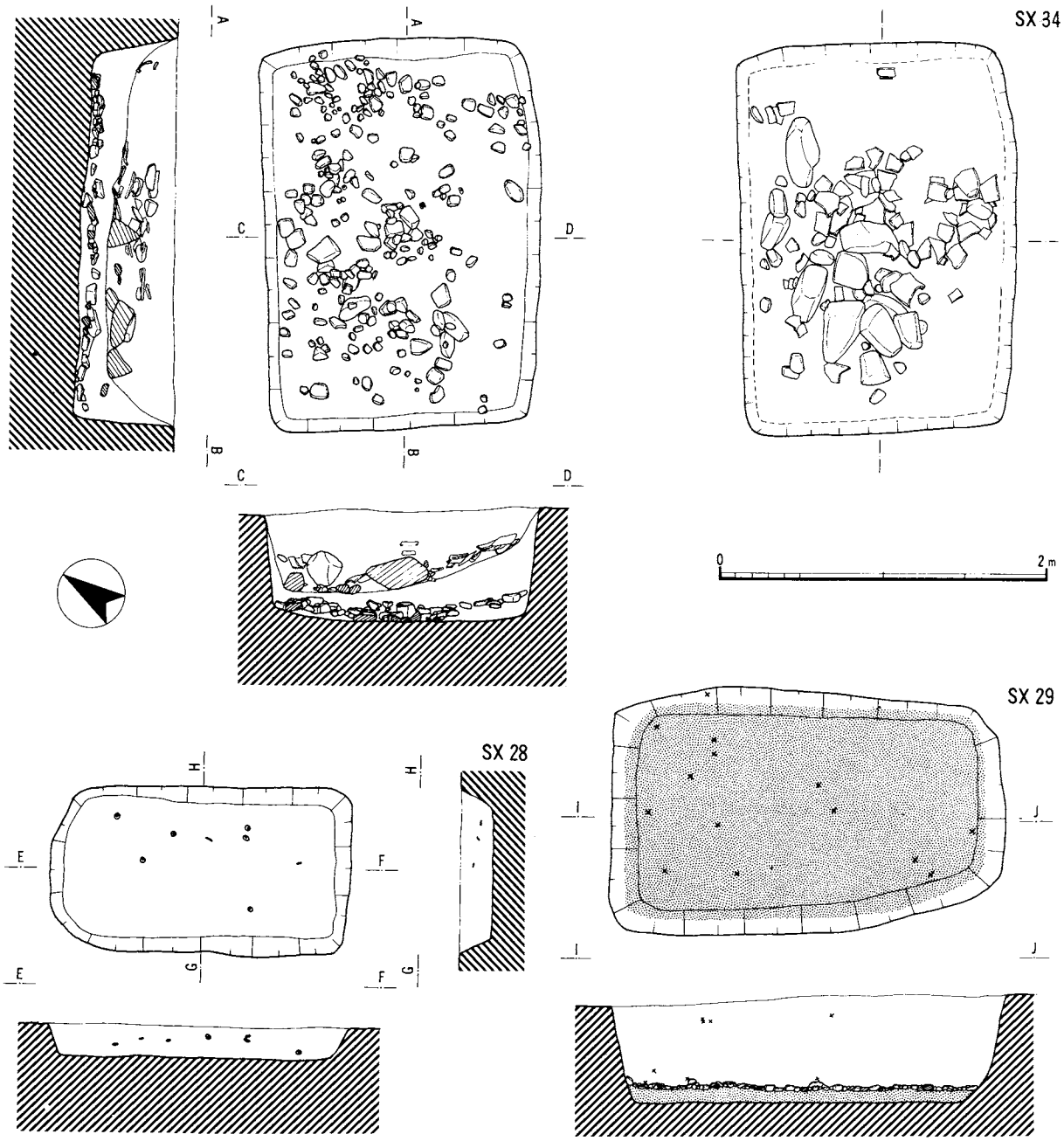
多倉田遺跡遺構平面図（水平；1：300、垂直；1：200、基準線；21m）



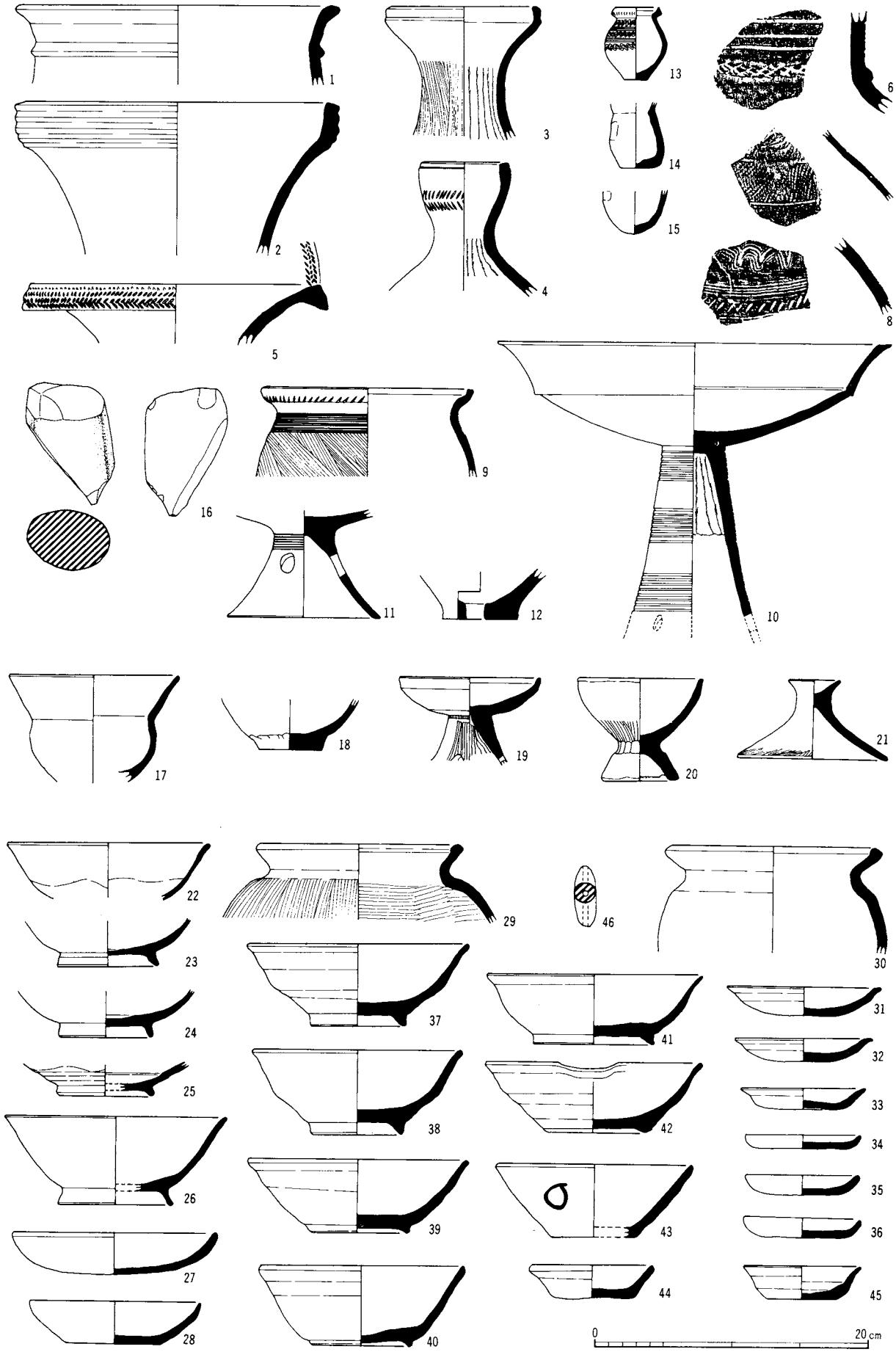
A地区西部主要遺構実測図・SD26土層断面図（1：80、SD26；1：40）



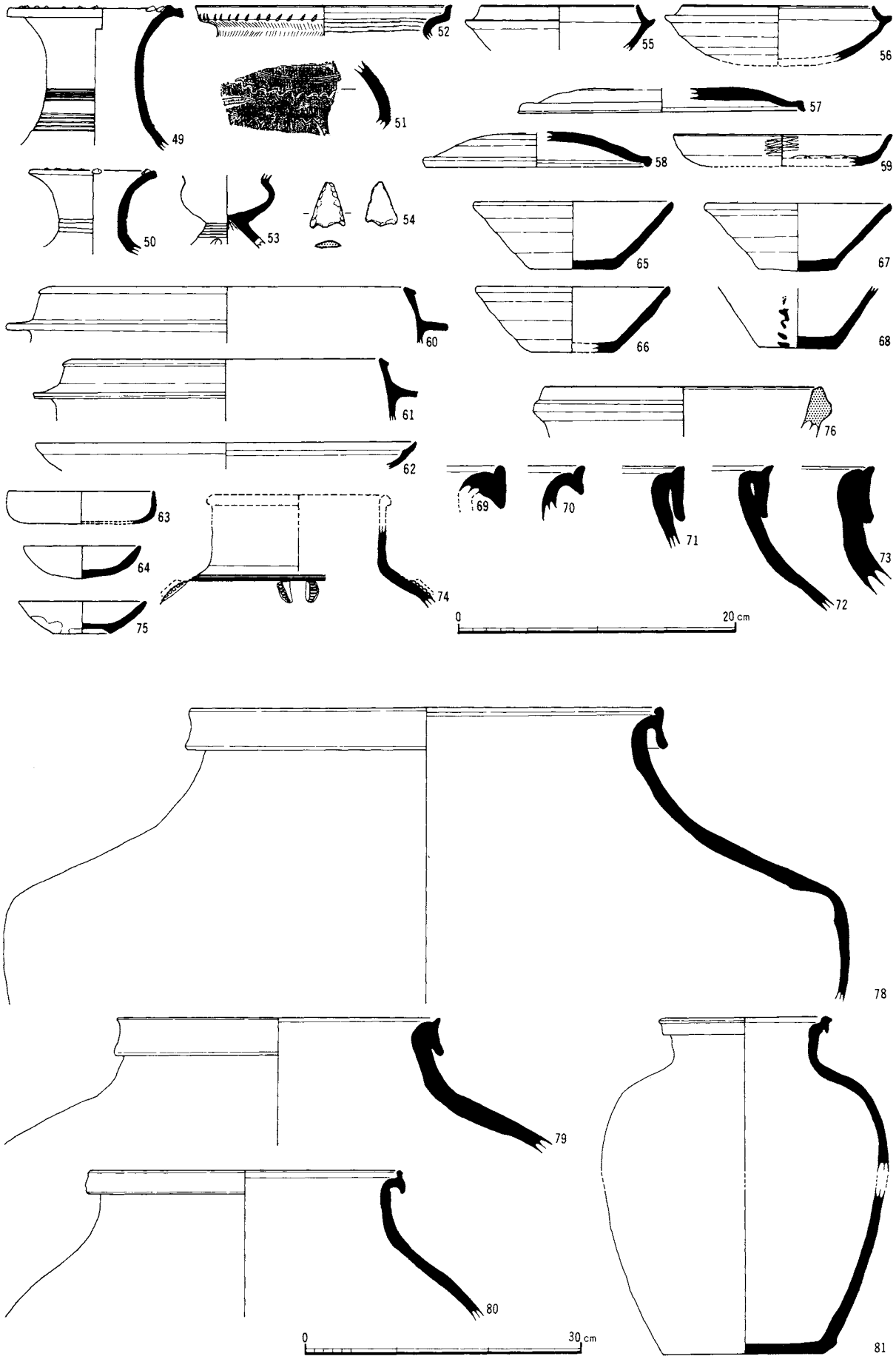
井戸実測図（1：40、①暗茶褐色砂質土　②白灰色砂質土　③茶褐色砂質土　④混礫黒灰色砂質土）



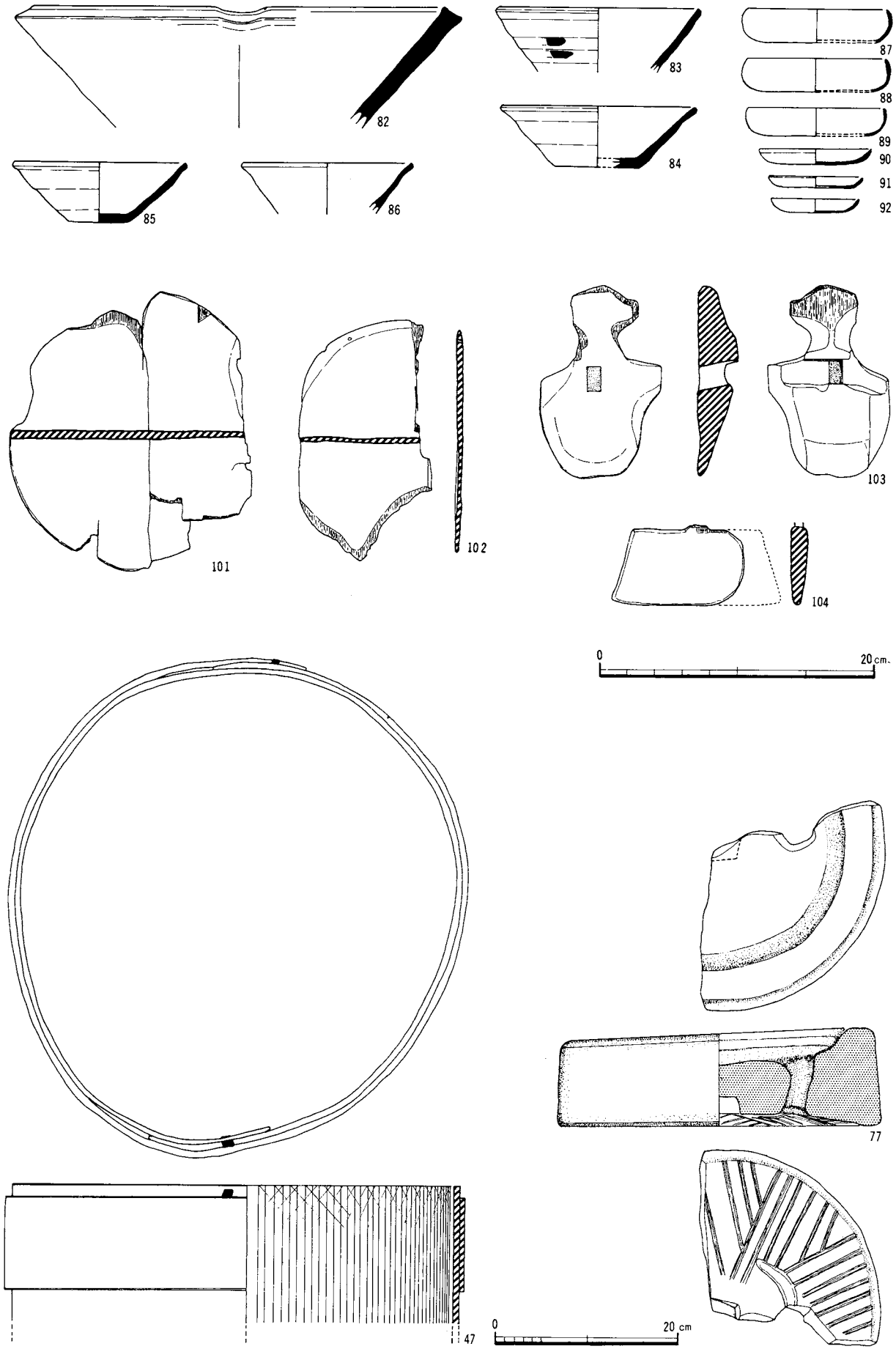
土坑墓実測図（1：40、基準線20.4m、網目；集石）



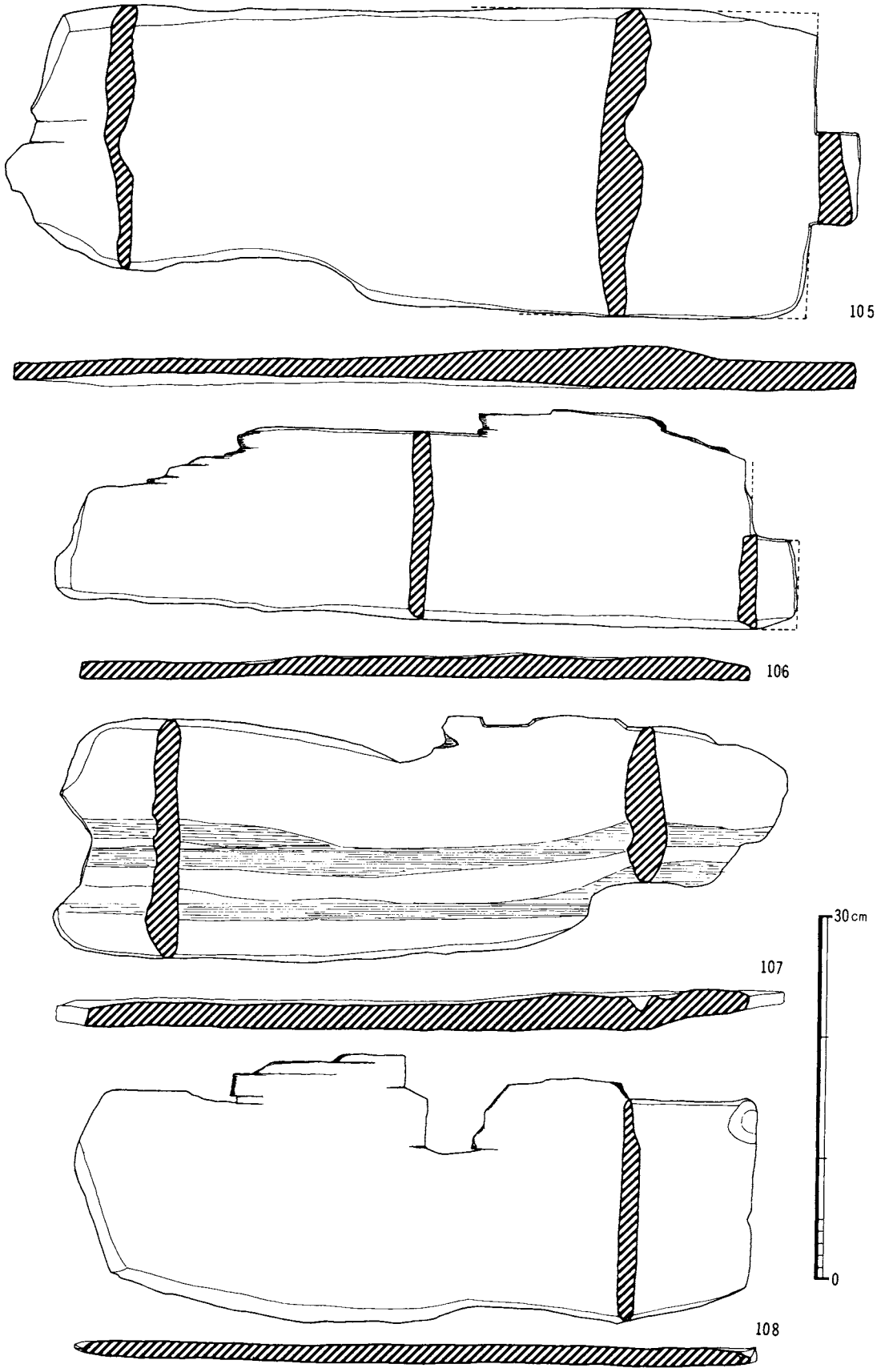
A地区出土遺物実測図・土器拓影（1：4、46; 1：2）



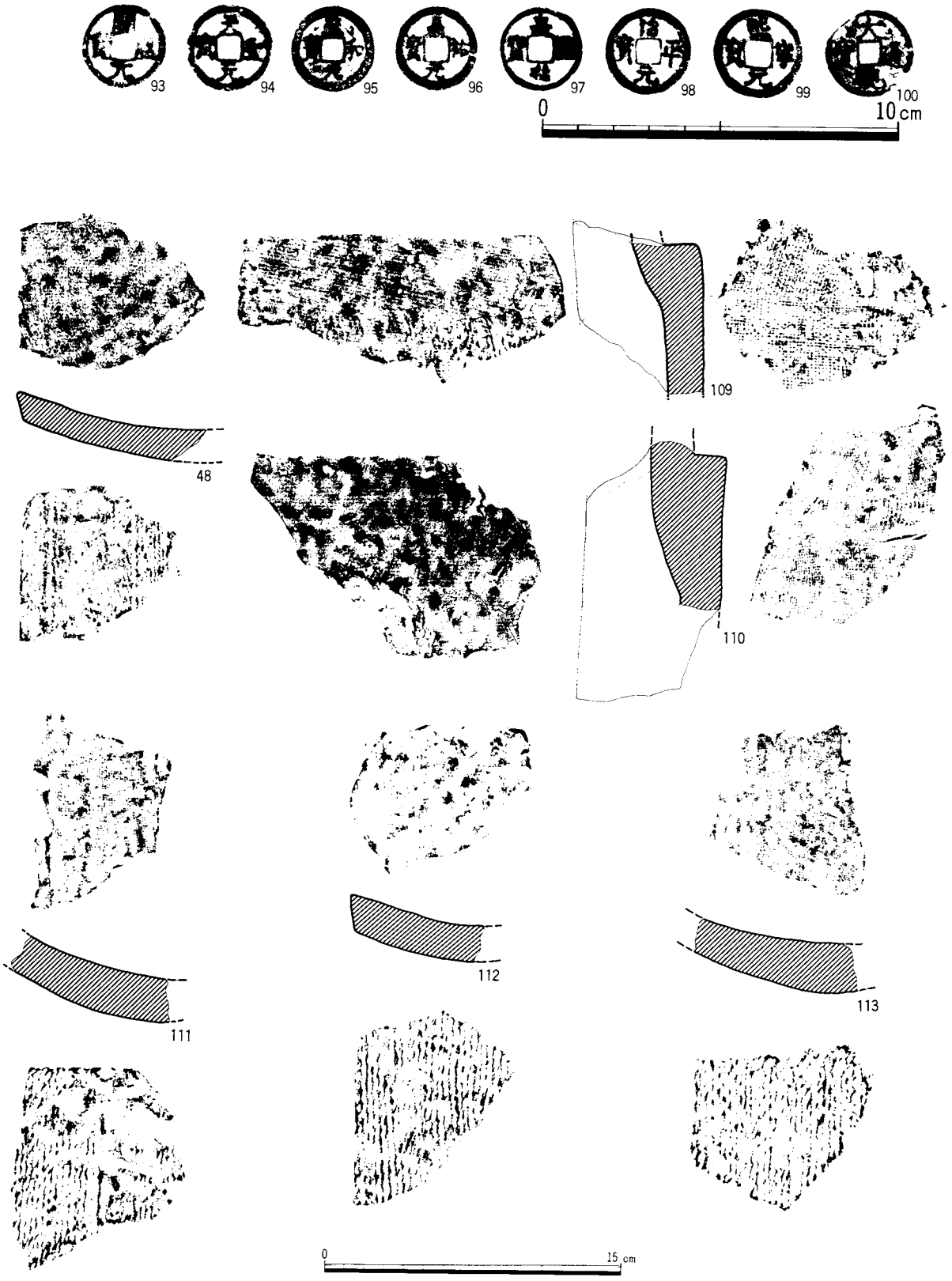
B地区出土遺物実測図・SX34出土土器実測図（1：4、54; 1：2、SX34; 1：6）



SX34出土土器実測図・木製品実測図・石製品実測図（上段; 1：4、下段; 1：6）



SE18出土木製品実測図（1：5）

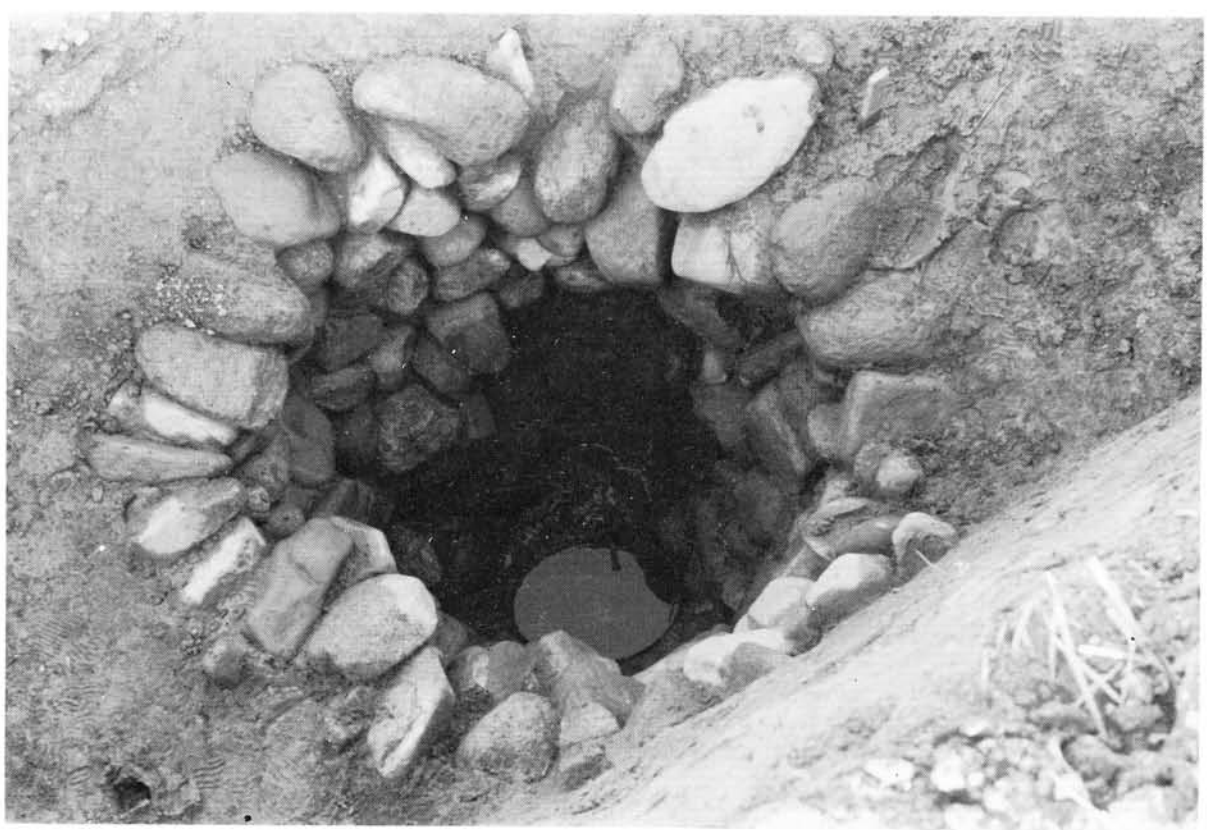


銅銭拓影・瓦拓影（2：3、瓦; 1：3）

A地区西部調査前風景（東から）

A地区西部近景（西から）

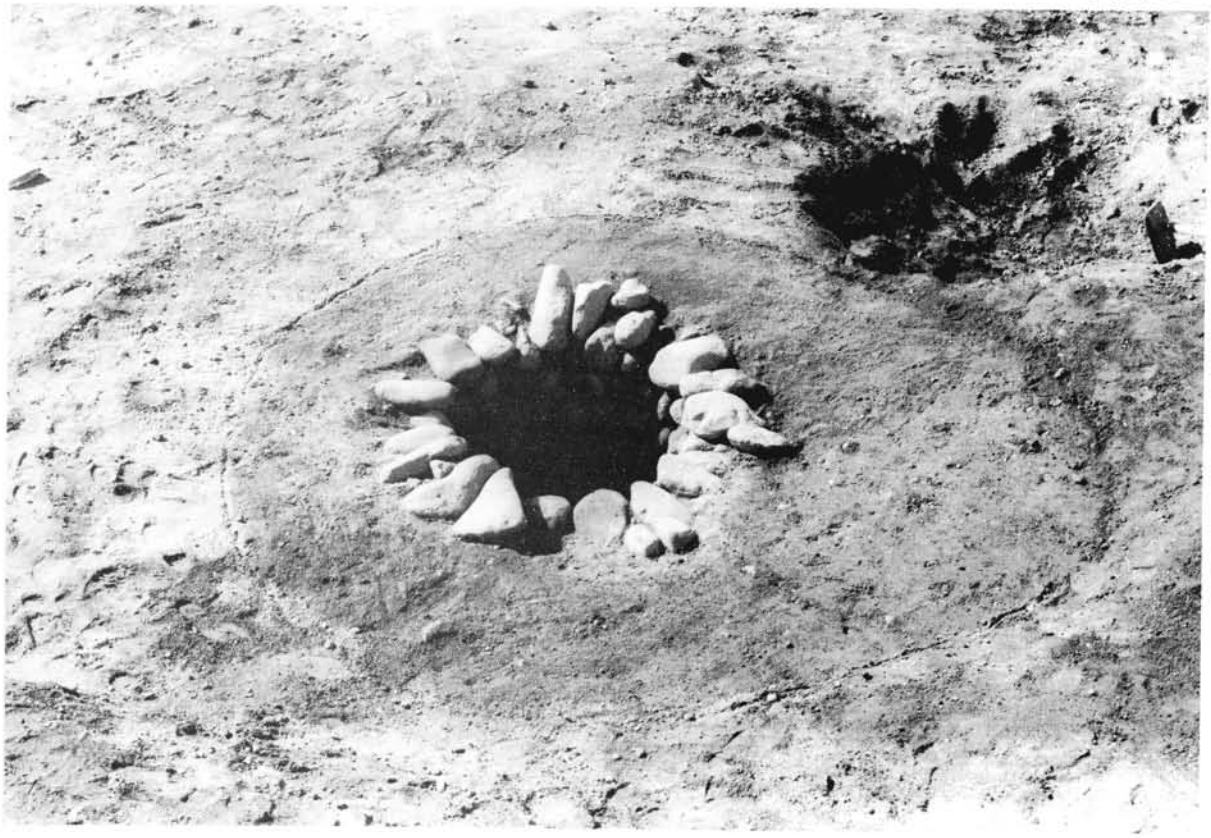
A地区近景（東から）



SE15

B地区調査前風景（東から）

B地区近景（西から）

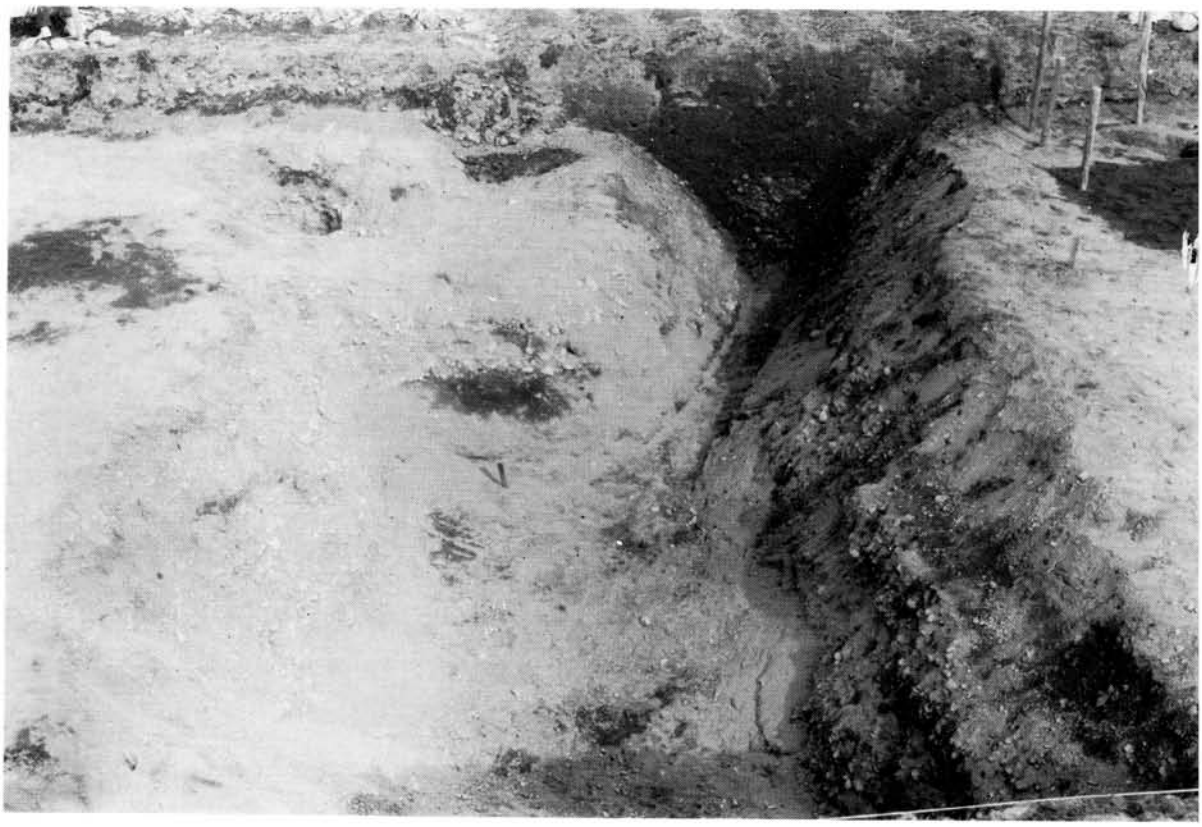


ＳＥ18（北から）

ＳＥ18断面底部（南から）

SD20（東から）

SD21・22（西から）

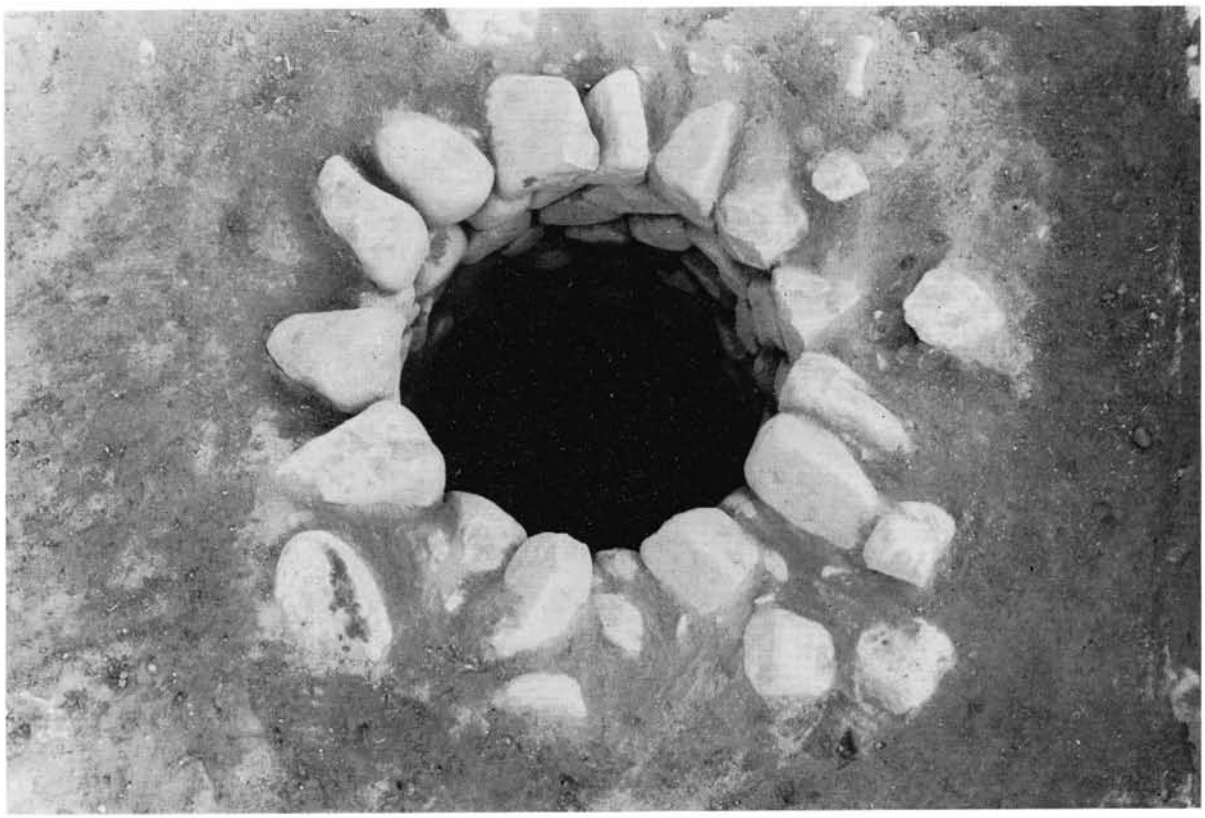


SD26（南から）

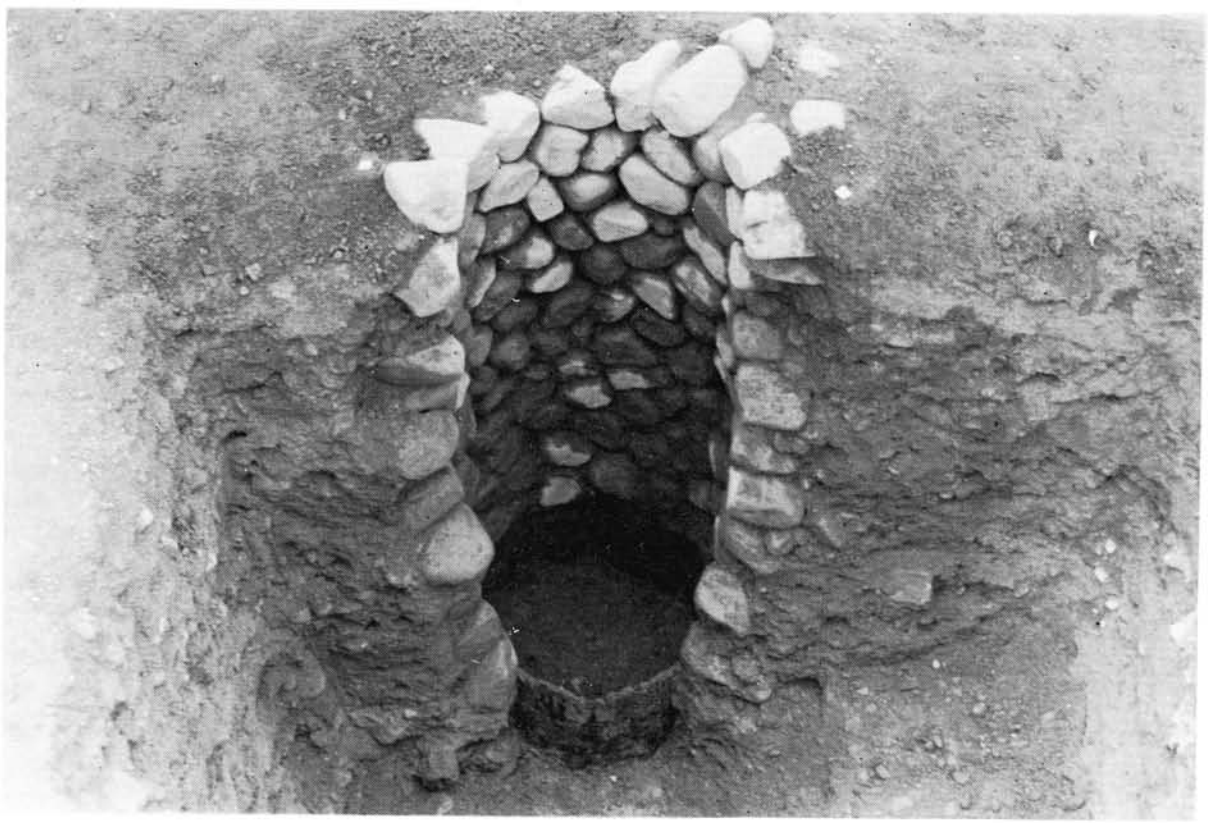
SX28（東から）

SX29（東から）

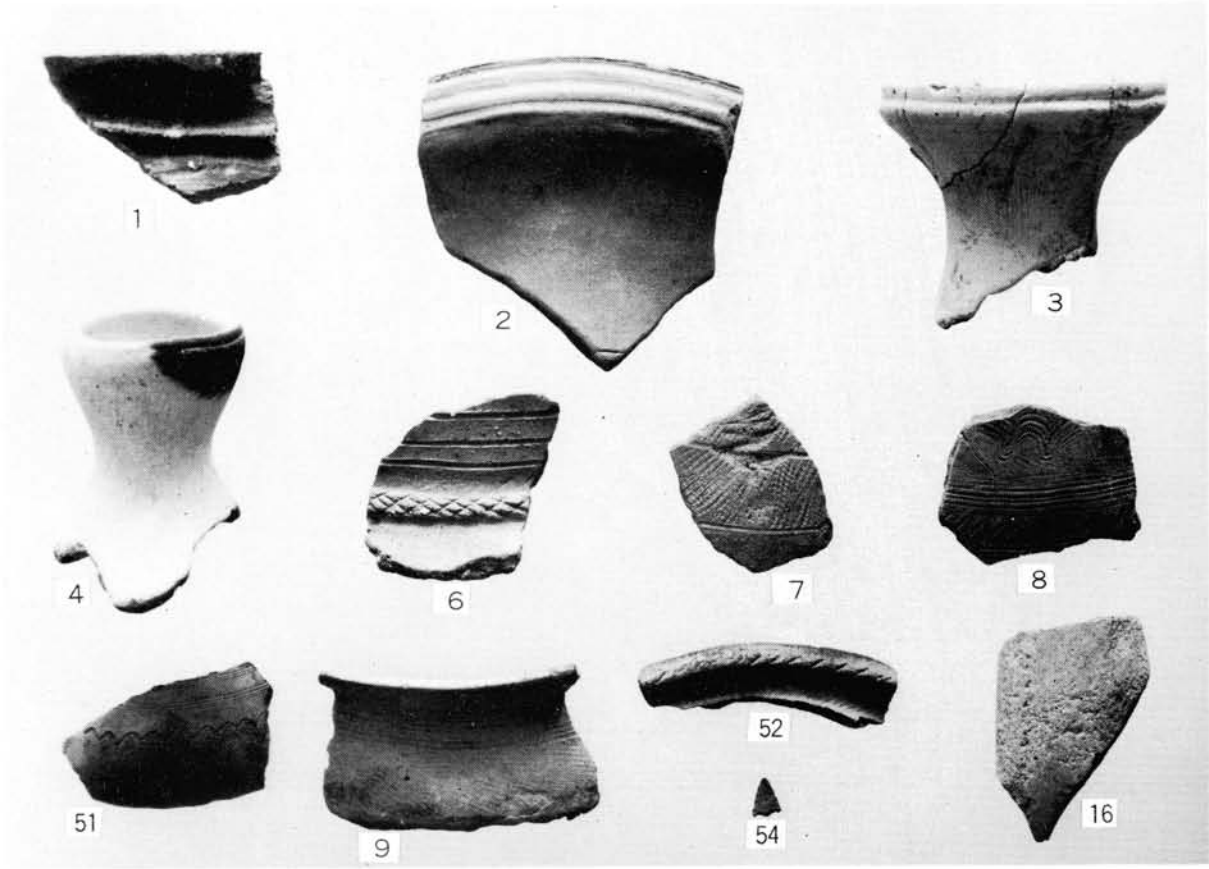
SX34遺物出土状況（西から）



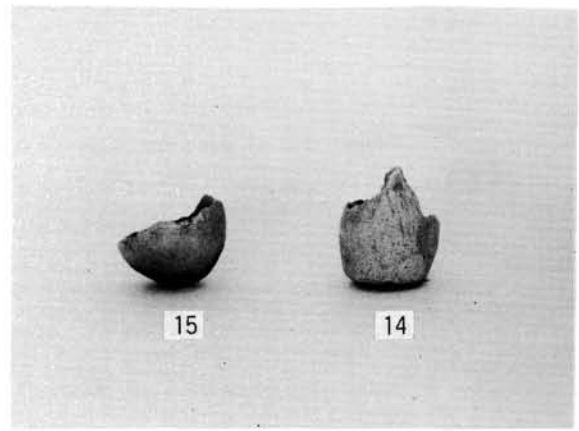
ＳＥ36（西から）

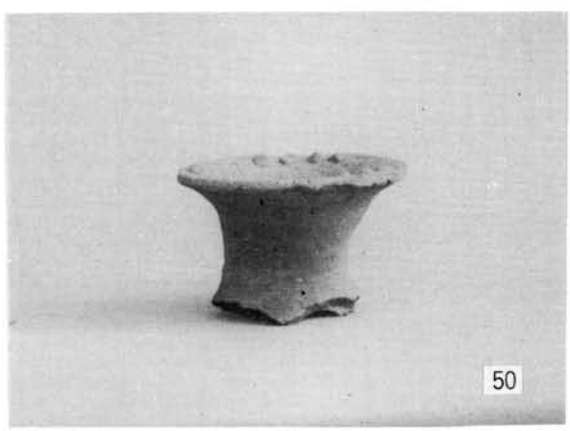


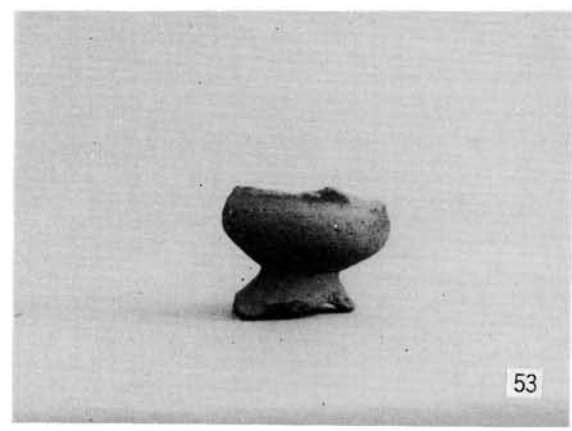
ＳＥ36断面（北から）



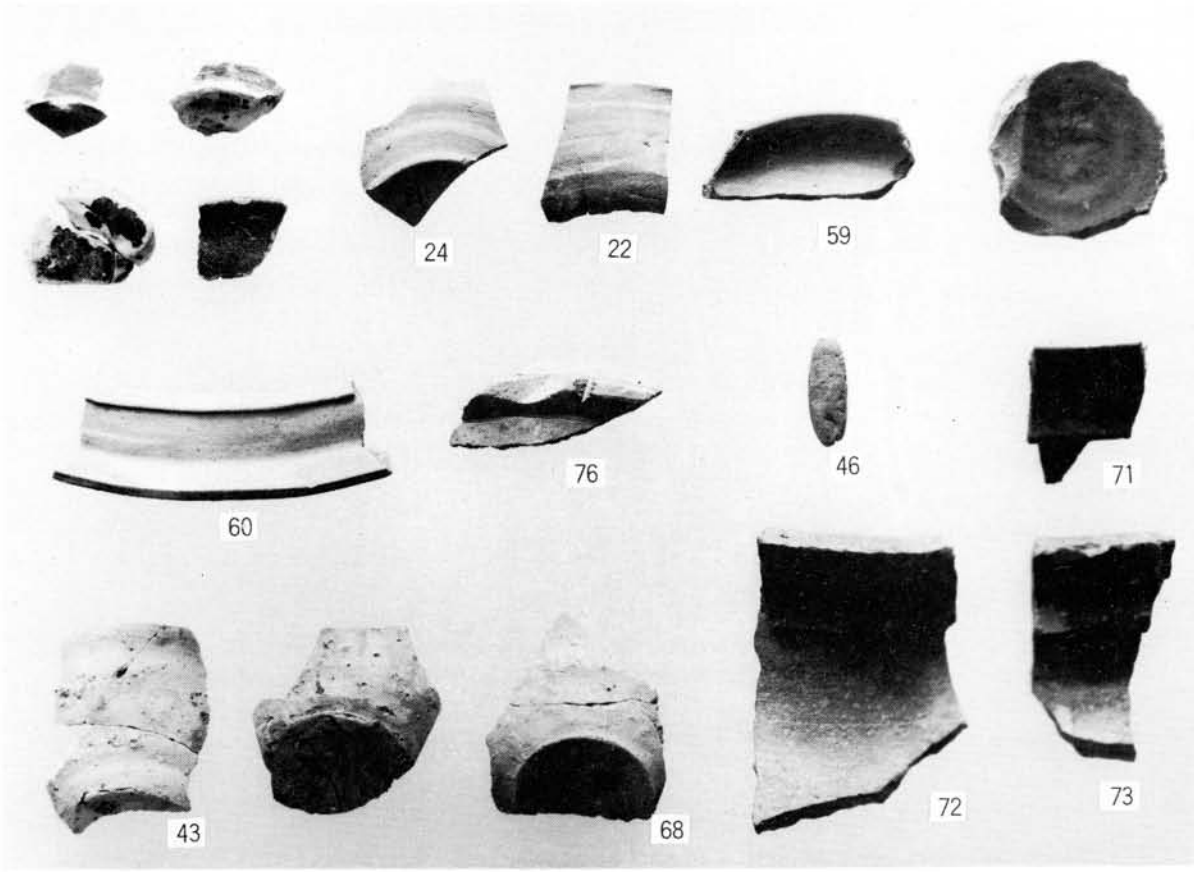
縄文土器・弥生土器・石器（1：3）

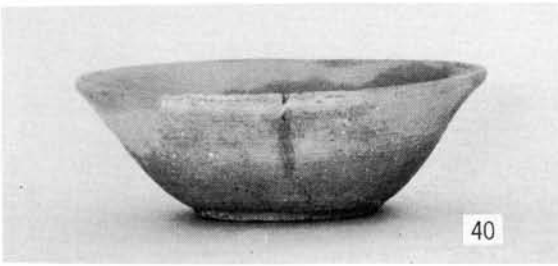


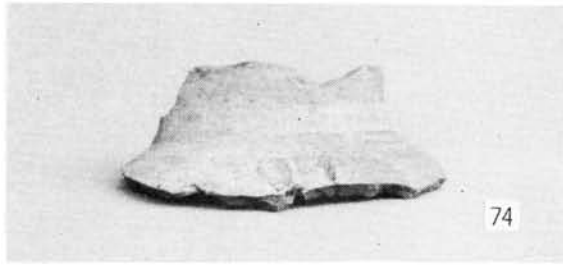




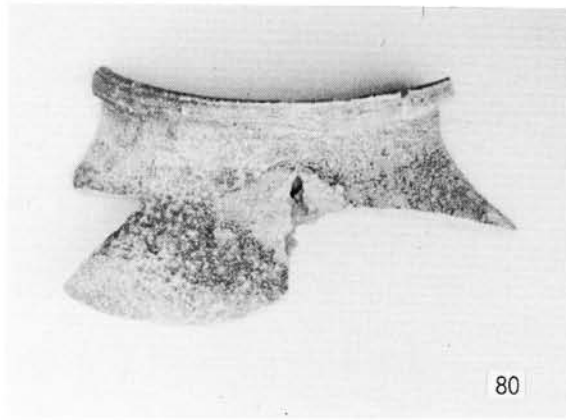
弥生土器・土師器（1：3）



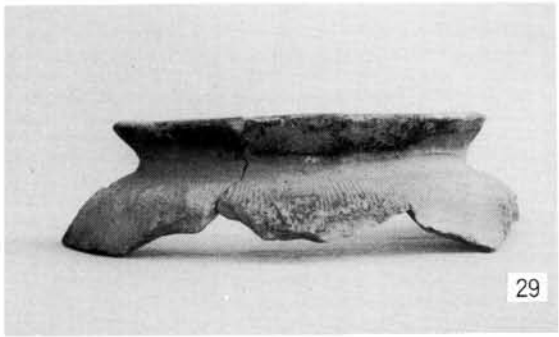


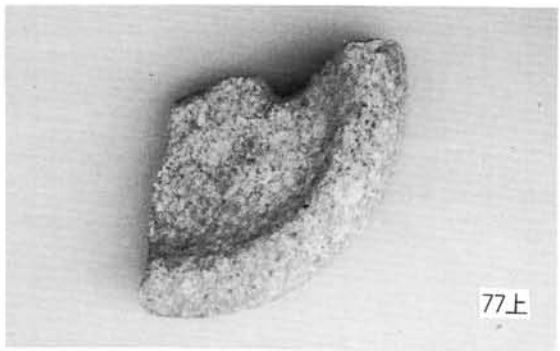


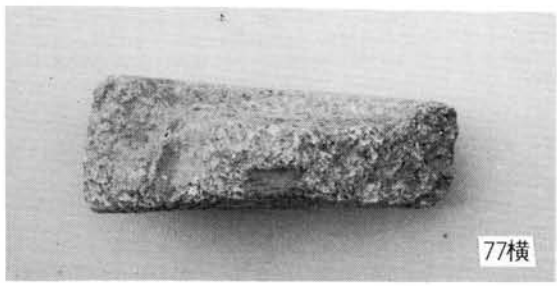
緑釉陶器・灰釉陶器・土師器・青磁・山茶椀・常滑古瀬戸（1：3）

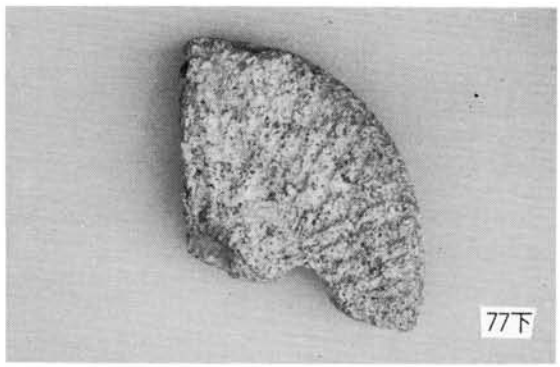


SX34出土大甕（1：6、81; 1：3）

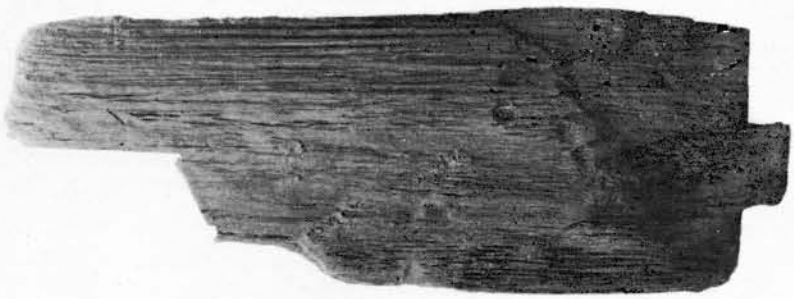




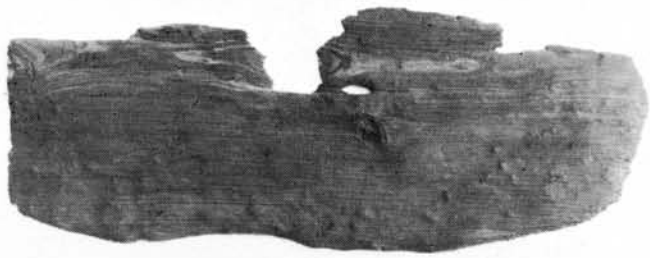




土師器・山皿・石臼（１：３、77; １：６）



105



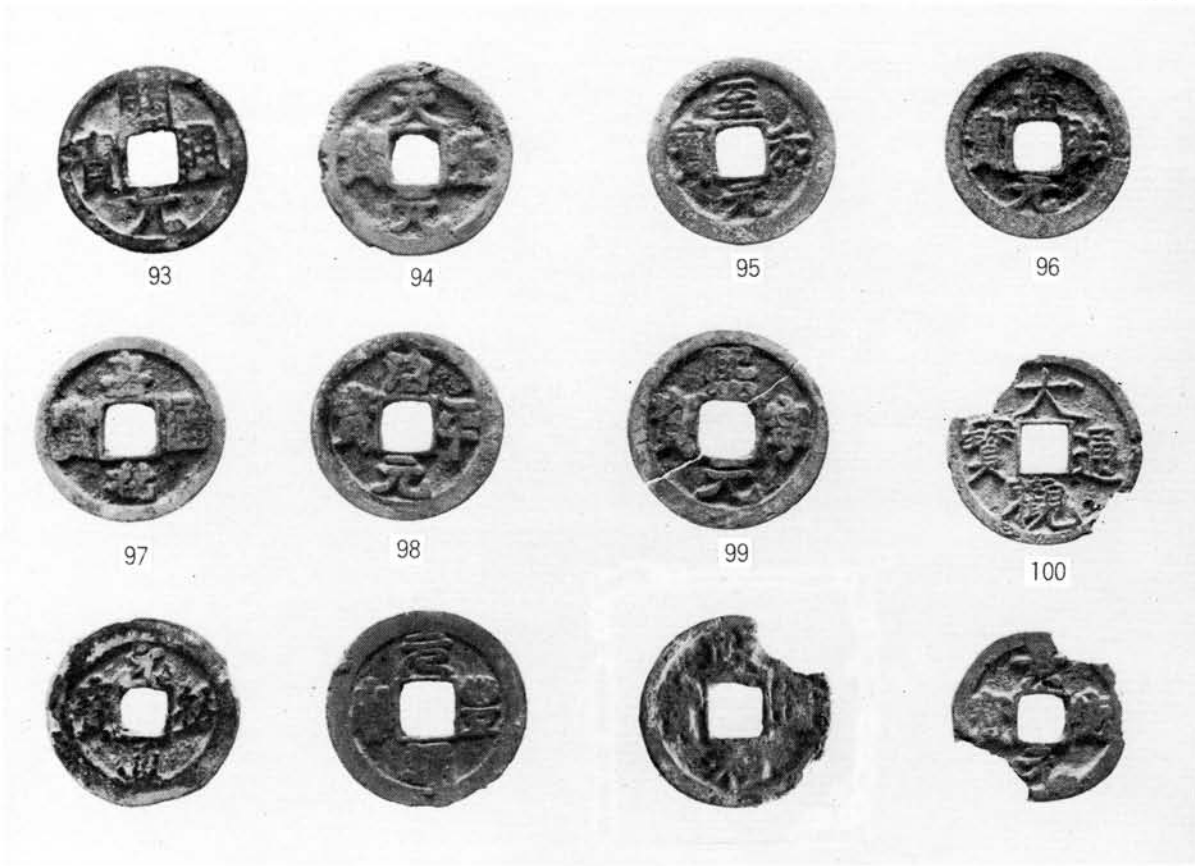
108

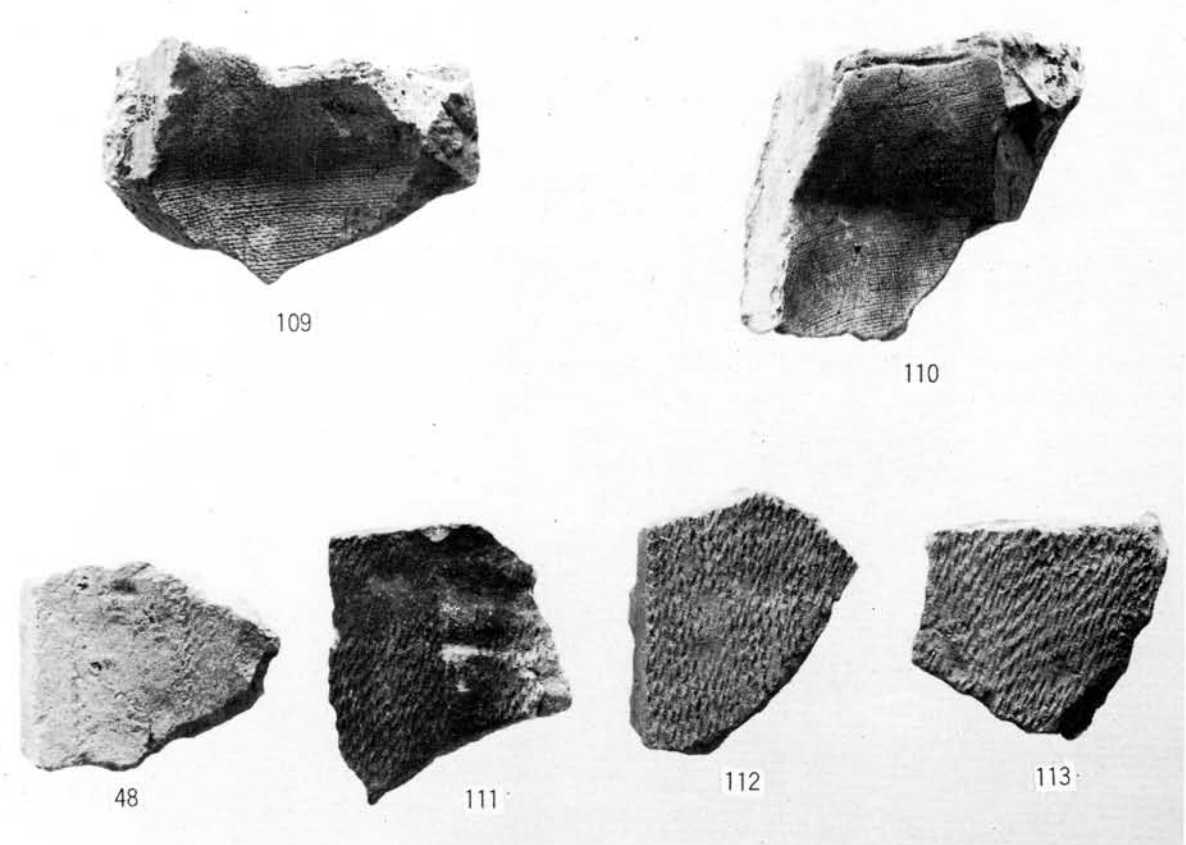
103表

103裏

101

ＳＥ18出土木製品（上段; １：６、下段; １：３）





銅銭・瓦（1：1、瓦1：3）

昭和56(1981)年3月に刊行されたものをもとに
平成16(2004)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告46

多倉田遺跡発掘調査報告

1981年3月31日

編集
発行　三重県教育委員会

印刷　東海印刷株式会社